

第6節 中世の調査成果

1 概要(第91図)

倉谷西中田遺跡において、最も繁栄する時期が中世、13世紀から16世紀である。

この時期の遺構は、掘立柱建物跡7棟、柵列1、井戸2基、土墳墓1基、土坑27基、堀3条、区画溝7条、その他の溝4条、道路状遺構3条、畑状遺構1基、ピット群9箇所などがある。

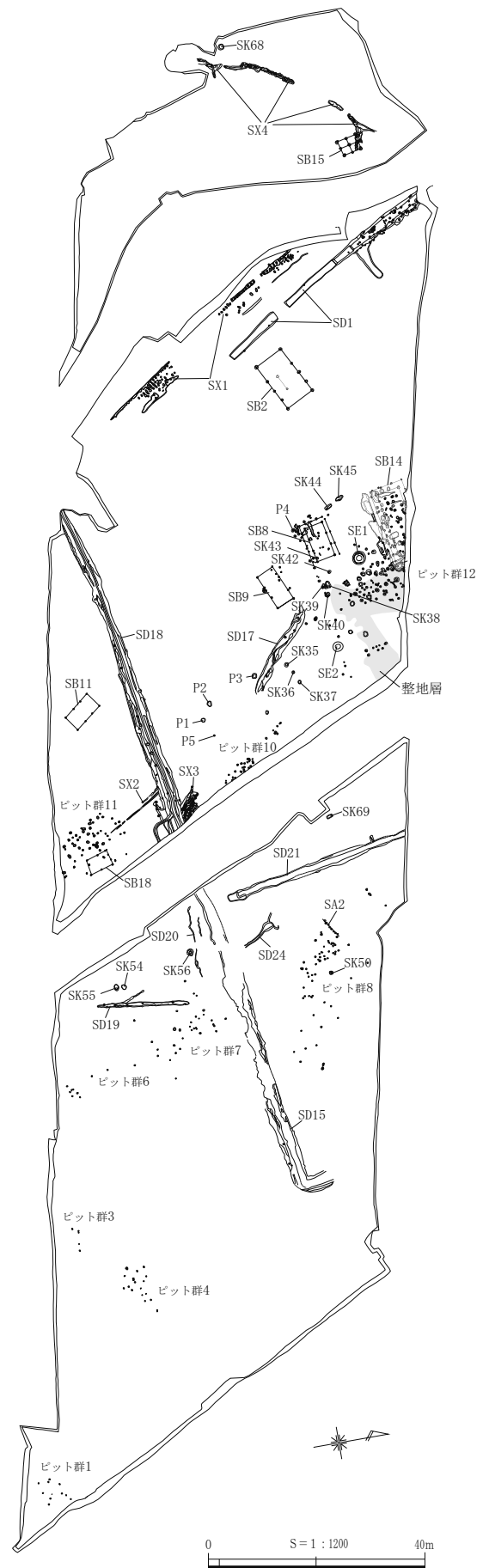
この時期の遺構は、堀(SD18)の拡張を境に大きく二時期に分けることができる。

おおむね13世紀から14世紀にかけての古段階では、南側を古SD18によって区画された範囲に、掘立柱建物跡SB8・14、SE1・2、土墳墓SK38、土坑SK13・14・16・17・18・24・39・52・79・80・81、区画溝SD8～13、性格不明の溝SD24、ピット群1、ピット群7、ピット群8、ピット群10、ピット群12、柱穴1・2・3・4・5、畑状遺構SX3がある。また、この時期には3区北東側の谷部を整地し、建物を建てていたと考えられる。

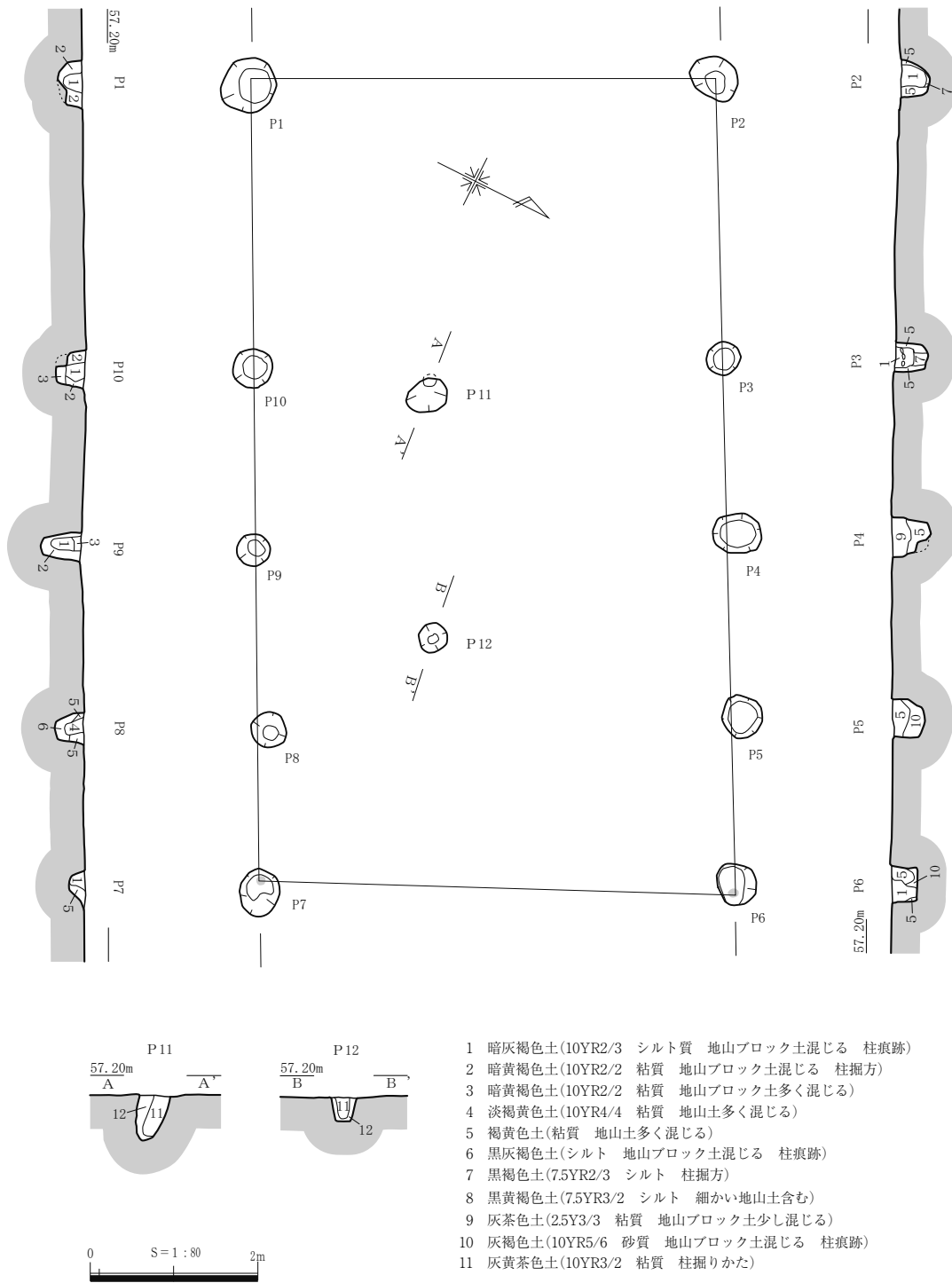
15世紀ごろには、堀SD1・新SD18・SD15による、東西一辺130m以上、南北90m以上の歪ではあるが方形区画が完成したものと考えられ、その区画内に新に掘立柱建物跡SB2、方形区画をさらに仕切るSD21、性格不明の溝SD17、ピット群6、道路状遺構SX1・2、区画外にはピット群11が造られている。

なお、詳細な時期は不明であるが、その他に掘立柱建物跡SB9・15、柵列SA2、土坑SK35～37・40・41・42・43・44・45・50・54・55・56・68・69・82、性格不明の溝SD19・20、道路状遺構SX4、ピット群3、ピット群4がある。

この時期の出土遺物には、国産陶磁器の他に輸入陶磁器が多量にあることから、当遺跡は、当時の有力者層の居館と考えることができる。



第91図 中世遺構分布図



第92図 SB2

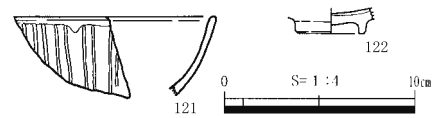
表17 SB2ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	62×67-30	柱痕径22cm	P 7	48×58-28	柱痕径22cm
P 2	47×58-33	柱痕径22cm	P 8	41×42-34	柱痕径13cm
P 3	39×42-39	柱痕径13cm	P 9	38×39-47	柱痕径14cm
P 4	46×58-46		P10	47×49-34	柱痕径12cm
P 5	45×50-38		P11	40×49-53	柱痕径20cm
P 6	45×50-29	柱痕径12cm	P12	28×34-27	柱痕径10cm

2 掘立柱建物跡

SB2 (第92・93図、表17、PL.18・44)

3区のやや北西側のU3・4、V3・4グリッドにあり、標高56.9m付近の平坦面に立地する。



第93図 SB2出土遺物

桁行4間(約9.6m)、梁行1間(約5.6m)、柱間1.8～3.3mを測り、平面積は54㎡である。長軸方向はN-64°-Eで、やや北側に振れる東西棟の大型の掘立柱建物跡である。西端の柱間が他の柱間に比べて長いのが特徴である。柱穴径は40～60cm、深さ20～50cmを測る。すべての柱穴で柱痕を確認した。このうち柱痕跡が確認できたのはP1・P6・P7である。柱径は約20cmである。

身舎内にはP11・12を検出した。これらは東柱であったものと考えられる。その他にも柱穴は存在していたと思われるが、現在は圃場整備の掘削のために失われているものとする。

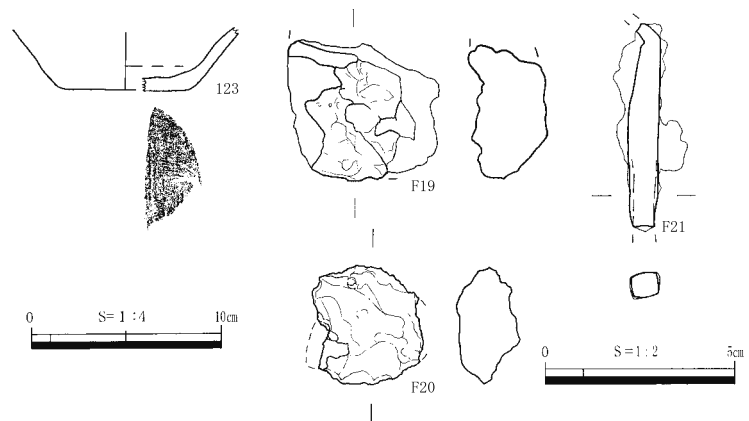
出土遺物には、P4柱痕から形骸化した鎬連弁をもつ青磁碗121、P11柱掘方から中国製天目茶碗底部122がある。

121は龍泉窯系碗B4類に相当することから、本遺構の時期は16世紀ごろと考えられる。

SB8 (第94・95図、表18、PL.18・61・65)

3区北側のR3・R4・S3・S4グリッドにあり、標高56.4～56.6mの平坦面に立地する。

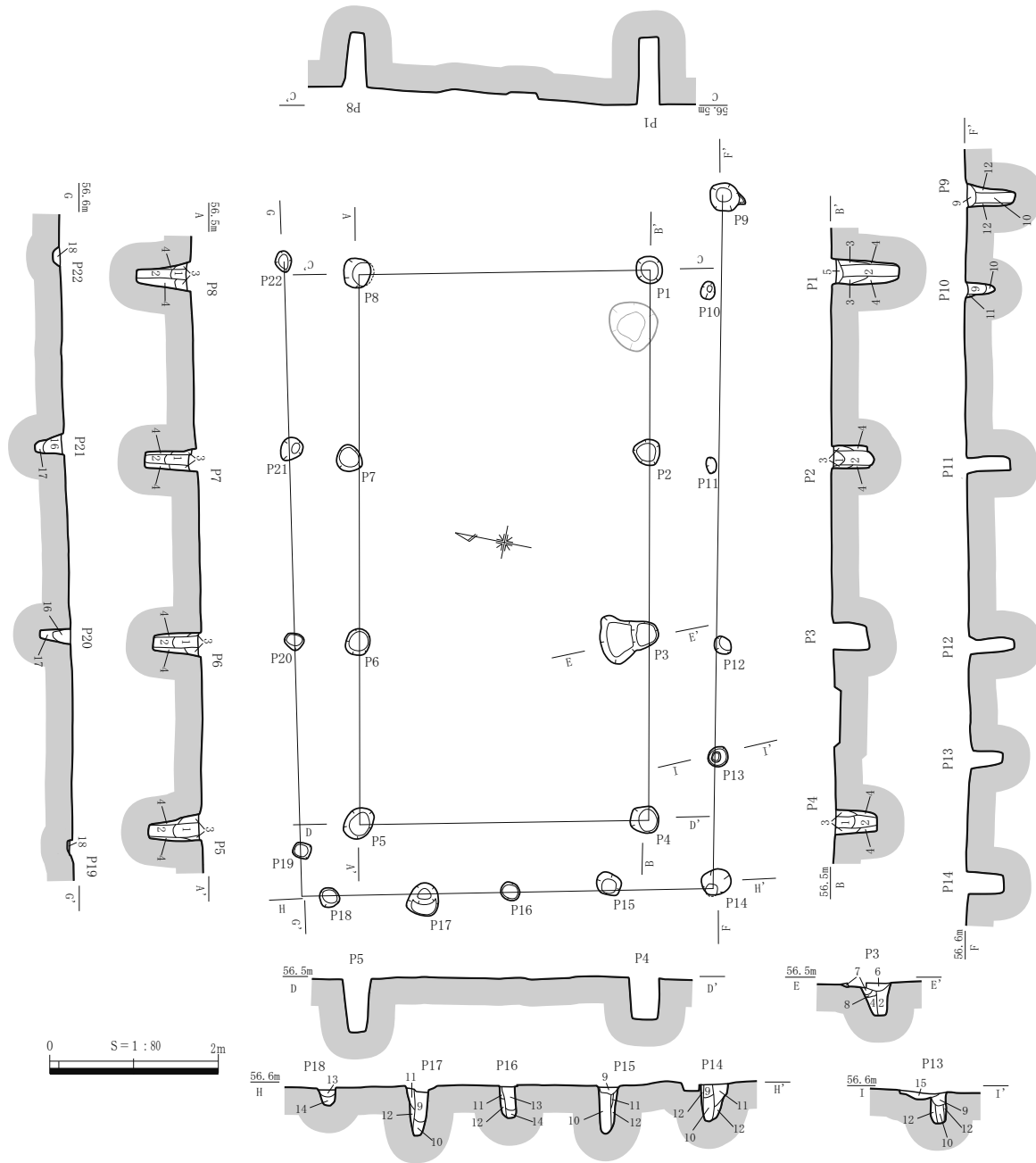
桁行3間(6.5m)、梁行1間(3.4m)を測り、平面積は22.6㎡である。長軸方向はN-79°-Eで、東西棟の掘立柱建物跡である。建物周囲には東側を除く3面に廂を付帯させる。廂を含めた平面積は40.07㎡となる。建物柱穴と廂柱穴の距離が近いこと、足場柱穴の可能性もあるが、廂付建物として復原した。建物の柱穴掘方の規模は直径0.3～0.4m、深さ0.5～0.6mで、柱痕跡の径は15～20cmである。廂の柱穴掘方の規模は直径0.2～0.3m、深さ0.1～0.5mで、柱痕跡の径は10～15cmである。廂の柱間寸法と底面標高に大きくばらつきがある。



第94図 SB8出土遺物

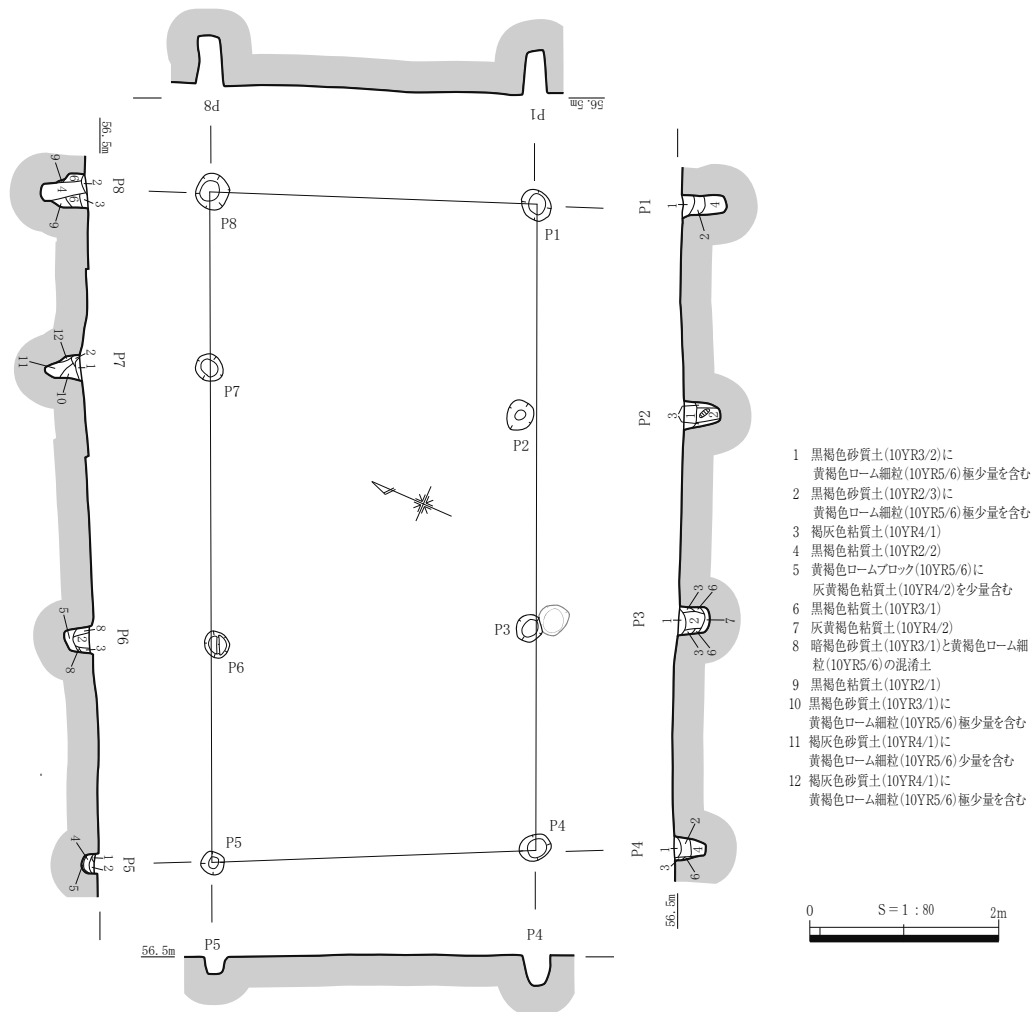
表18 SB8ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	31 × 32 - 80	柱痕径 13cm	P12	19 × 23 - 53	
P2	31 × 32 - 48	柱痕径 16cm	P13	23 × 24 - 35	柱痕径 10cm
P3	29 × 69 - 41	柱痕径 10cm	P14	29 × 35 - 42	柱痕径 10cm
P4	32 × 33 - 48	柱痕径 11cm	P15	25 × 30 - 55	柱痕径 12cm
P5	31 × 40 - 60	柱痕径 13cm	P16	20 × 24 - 37	柱痕径 12cm
P6	27 × 32 - 56	柱痕径 12cm	P17	34 × 38 - 58	柱痕径 12cm
P7	30 × 32 - 60	柱痕径 10cm	P18	23 × 24 - 23	
P8	31 × 34 - 63	柱痕径 10cm	P19	18 × 21 - 2	
P9	32 × 34 - 57	柱痕径 11cm	P20	18 × 24 - 35	柱痕径 12cm
P10	16 × 21 - 34	柱痕径 12cm	P21	24 × 29 - 35	柱痕径 13cm
P11	10 × 19 - 50		P22	18 × 26 - 7	



- | | |
|---|---|
| <p>1 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)多量を含む</p> <p>2 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)少量を含む</p> <p>3 褐色粘質土(10YR2/2)と黄褐色ローム細粒(10YR5/6)の混着土</p> <p>4 黒褐色粘質土(10YR3/1)</p> <p>5 暗褐色粘質土(10YR3/3)に灰黄褐色粘質土(10YR4/2)と黄褐色ロームブロック(10YR5/6)を含む</p> <p>6 褐灰色粘質土(10YR5/1)に炭化物多量を含む</p> <p>7 褐色粘質土(10YR5/1)</p> <p>8 褐色粘質土(10YR4/4)と黄褐色ローム細粒(10YR5/6)の混着土</p> <p>9 暗褐色粘質土(10YR3/3)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)少量を含む</p> | <p>10 黒褐色粘質土(10YR3/2)</p> <p>11 黄褐色ロームブロック(10YR5/6)に暗褐色粘質土(10YR3/3)少量を含む</p> <p>12 暗褐色粘質土(10YR3/3)と黄褐色ロームブロック(10YR5/6)の混着土</p> <p>13 にふい赤褐色粘質土(5YR4/4)に炭化物少量を含む</p> <p>14 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)</p> <p>15 褐灰色粘質土(10YR5/1)</p> <p>16 にふい赤褐色粘質土(5YR4/4)に炭化物少量を含む</p> <p>17 灰黄褐色粘質土(10YR4/2)</p> <p>18 にふい黄褐色粘質土(10YR4/3)</p> |
|---|---|

第95図 SB8



第96図 SB9

る。F21は鍛造品である。

123は八峠編年中世Ⅲ期に相当するものと考えられ、柱穴の埋土状況、建物の規模・配置などからも、13世紀から14世紀初頭にかけての建物と推定される。

SB9 (第96図、表19、PL.19)

3区北側Q4・Q5・R4・R5グリッドにあり、標高56.3～56.5mの平坦面に立地する。

桁行3間(6.8～7.1m)、梁行1間(3.4m)で、平面積24.05㎡を測る。長軸はN-66°-Eとなり、東西棟の掘立柱建物である。柱穴掘方の規模は直径0.3m程度、深さ0.2～0.5mで、柱痕跡の径は12～20cmである。

遺物は出土していないが、柱穴の埋土状況、建物規模・配置などから、中世に帰属すると推定される。

表19 SB9ピット一覧表

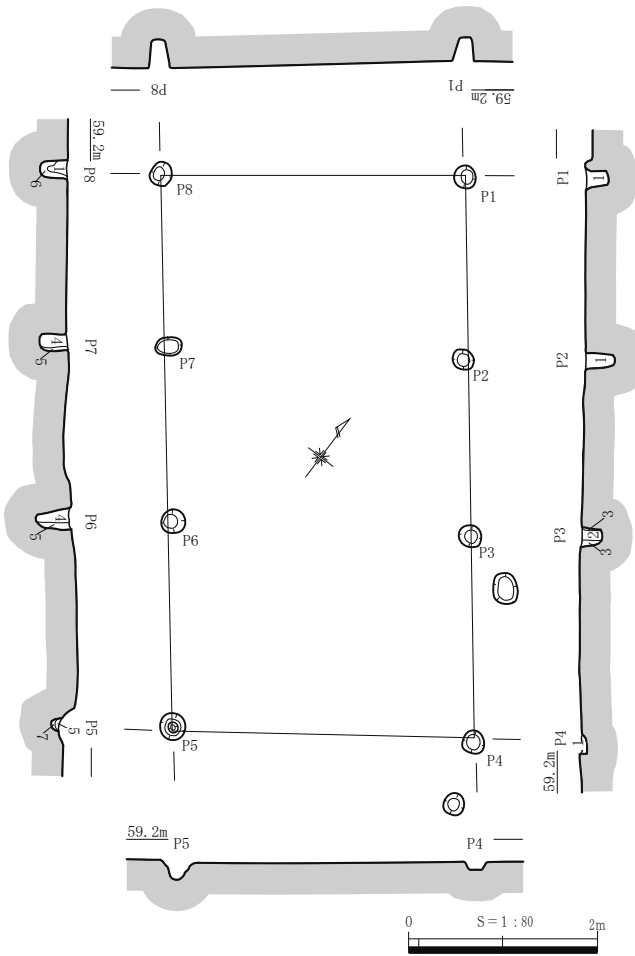
ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	28 × 35 - 45	柱痕径 20cm
P2	28 × 32 - 39	柱痕径 12cm
P3	28 × 30 - 32	柱痕径 17cm
P4	26 × 34 - 34	柱痕径 12cm
P5	21 × 25 - 18	
P6	25 × 30 - 30	柱痕径 14cm
P7	27 × 30 - 37	
P8	34 × 37 - 50	柱痕径 13cm

SB11 (第97図、表20、PL.19)

3区南側のP8・9グリッド、標高59.0mの平坦面に立地する。SD1やSD18からなる方形区画よりも外側に位置する。

表20 SB11ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	24×23-24	
P2	24×21-31	
P3	24×23-22	柱痕径10cm
P4	24×24-6	
P5	24×23-24	
P6	26×25-29	柱痕径15cm
P7	28×20-27	柱痕径13cm
P8	25×23-25	



- 1 黒褐色シルト(10YR2/2)
- 2 黒褐色シルト(10YR2/2) シルト。ロームブロックを含む。柱痕)
- 3 にぶい黄褐色シルト(10YR4/3) シルト。ロームブロックを多く含む)
- 4 灰黄褐色シルト(10YR4/2) シルト。柱痕)
- 5 黒褐色土(10YR4/3) シルト。ロームブロックを多く含む)
- 6 黒褐色土(10YR2/2) シルト。ロームブロックを含む)
- 7 黒褐色土(10YR5/6) シルト質粘土。粘性強)

第97図 SB11

桁行3間(6.0m)、梁行1間(3.3m)の側柱建物で、平面積は19.2㎡と推定される。長軸はN-37°-Wで、他の中世に帰属する掘立柱建物(SB2・8・9・14)とは方位が大きく異なり、やや西に振れる南北棟を呈す。柱間寸法は桁行が1.8~1.9mで、南半の1間分が2.2mとやや広がっている。梁行はP1-P8で3.26mとなる。概ね柱筋の通りは良い。柱堀方は径24~28cmの円形を呈し、柱痕跡から柱の径は15cm前後と推定される。柱穴の底面標高は桁行が58.58~58.88m、梁行が58.66~58.88mと一定しない。

出土遺物がないため、確実な時期は不明であるが、柱穴埋土の状況などから中世に帰属する建物と考えられる。

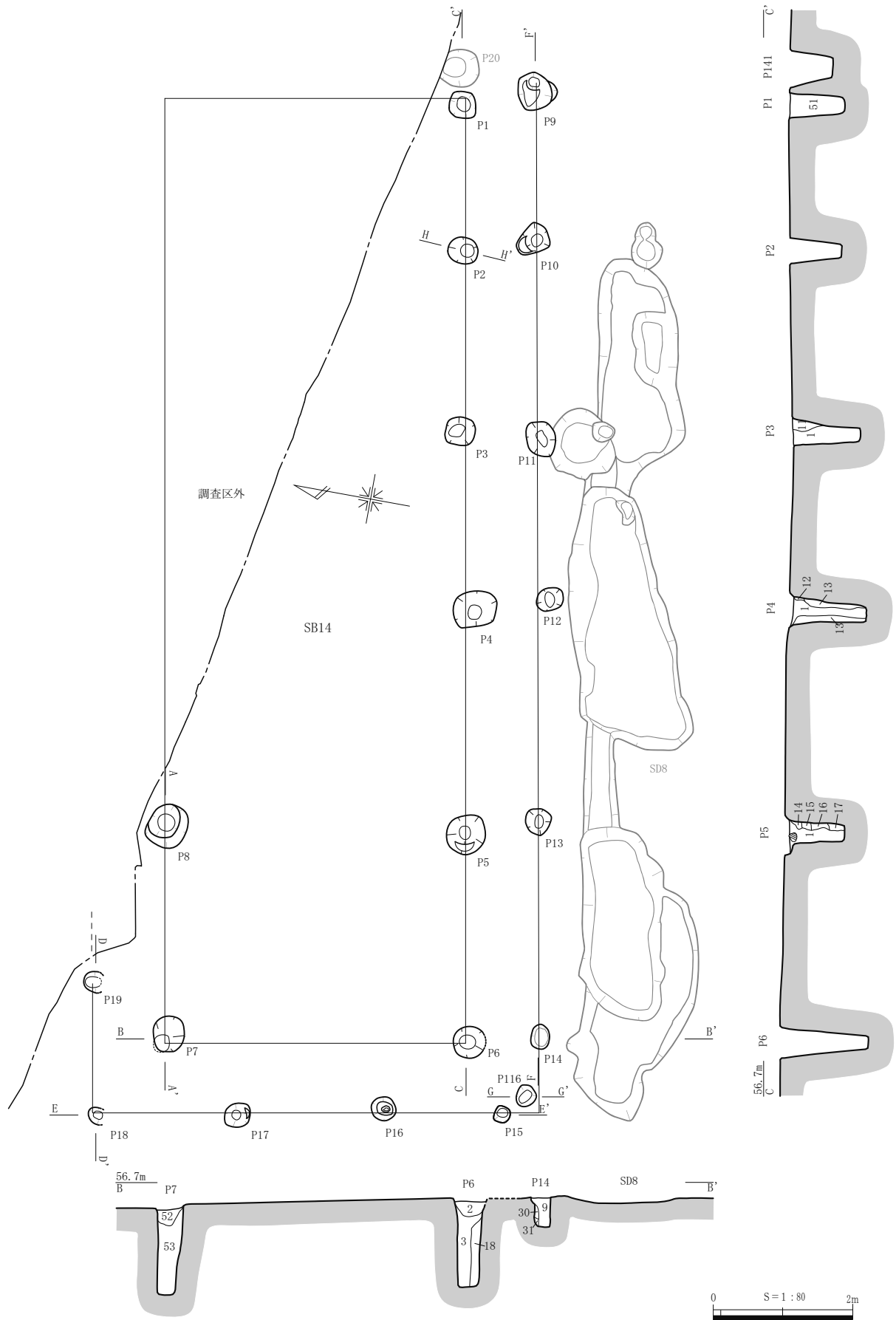
SB14(第98・99・100図、表21、PL.20・53・61・65)

3区北東部のR2・S2グリッド、標高54.4mの平坦面に立地する東西棟の掘立柱建物跡である。南側に本建物の区画溝と考えられるSD8が並行する。

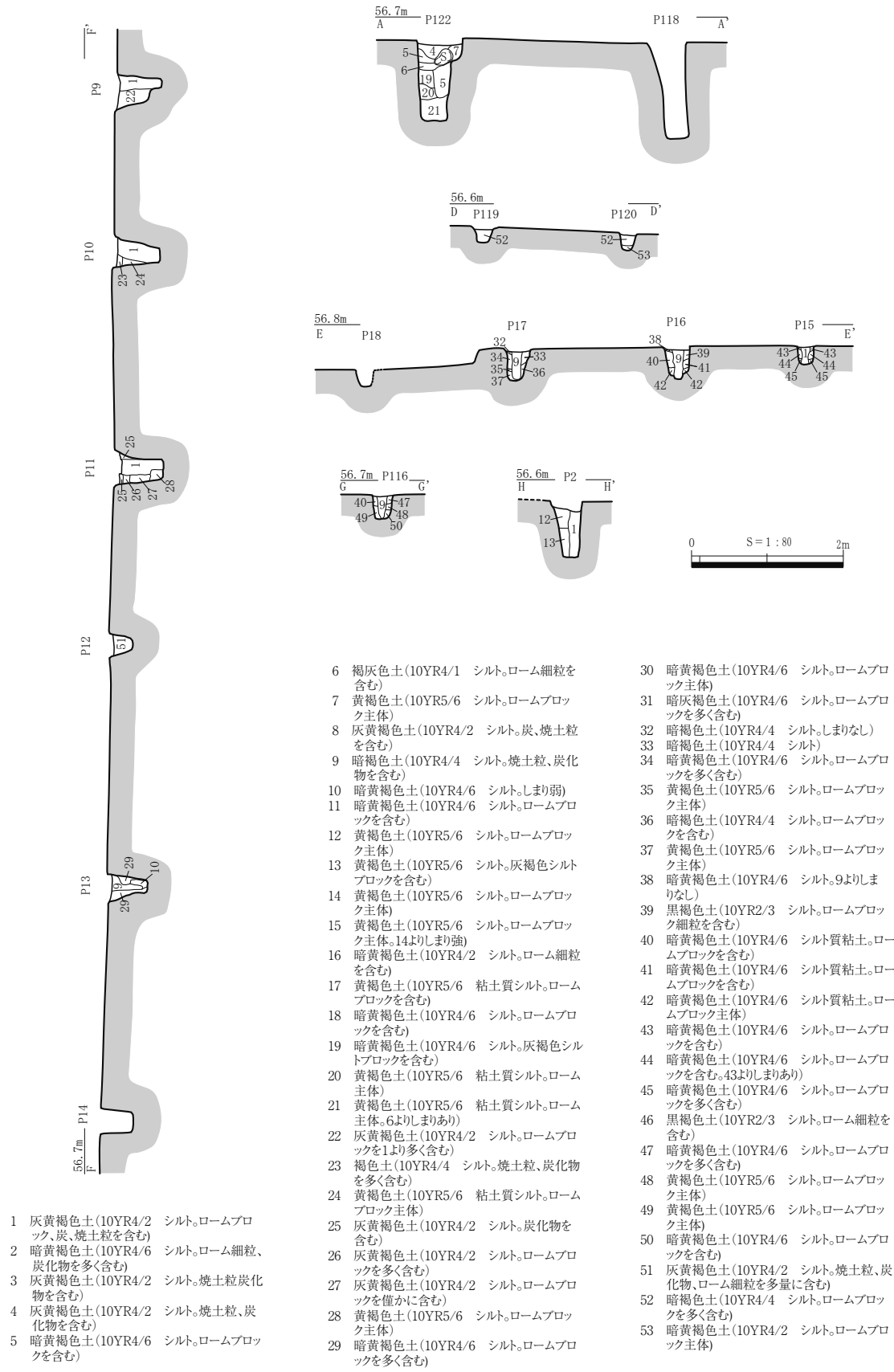
桁行5間(13.5m)、梁行1間(4.4m)の側柱建物と考えられ、三面に廂が付く。ただし、北東部が調査区外にあたるため、四面廂となる可能性もある。また、身舎内には同時期と考えられる柱穴が多数

表21 SB14ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	38×38-80	柱痕径25cm	P11	55×44-65	鉄滓、柱痕径20cm
P2	46×38-74	土器	P12	53×48-59	柱痕径20cm
P3	42×40-97	土器、柱痕径20cm	P13	36×36-53	柱痕径10cm
P4	64×51-111	土器、柱痕径16cm	P14	36×27-42	柱痕径16cm
P5	56×56-85	土器、鉄器、柱痕径16cm	P15	23×22-25	柱痕径12cm
P6	45×40-127	柱痕径20cm	P16	36×34-43	柱痕径11cm
P7	51×46-126	柱痕径25cm	P17	37×34-43	柱痕径11cm
P8	63×55-108		P18	25以上×23-22	柱痕径15cm
P9	53×48-59	柱痕径16cm	P19	-×30-18	柱痕径18cm
P10	50×36-62	柱痕径20cm	P20	53×48-59	



第98図 SB14(1)



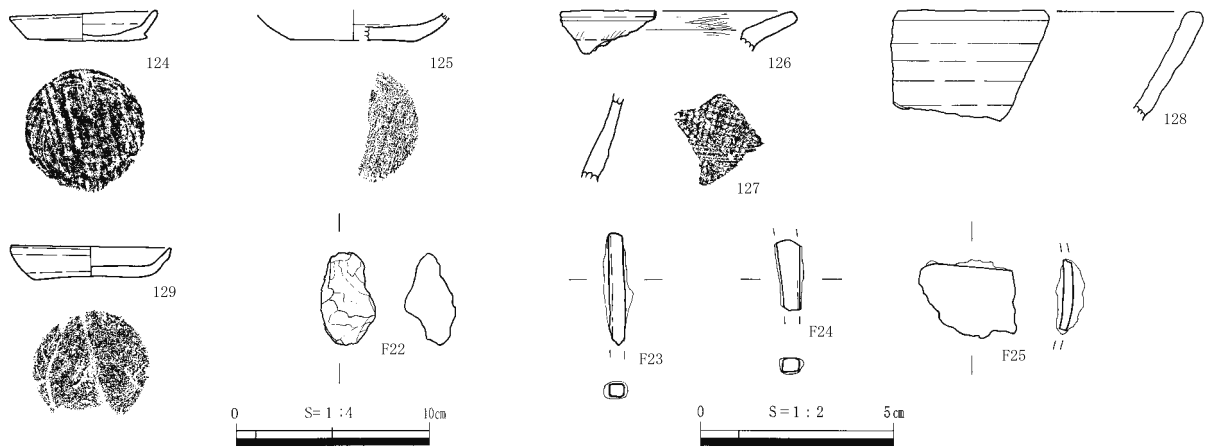
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2 シルト。ロームブロック、炭、焼土粒を含む)
- 2 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ローム細粒、炭化物を多く含む)
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2 シルト。焼土粒炭化物を含む)
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2 シルト。焼土粒、炭化物を含む)
- 5 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを含む)

- 6 褐色土(10YR4/1 シルト。ローム細粒を含む)
- 7 黄褐色土(10YR5/6 シルト。ロームブロック主体)
- 8 灰黄褐色土(10YR4/2 シルト。炭、焼土粒を含む)
- 9 暗褐色土(10YR4/4 シルト。焼土粒、炭化物を含む)
- 10 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。しまり弱)
- 11 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを含む)
- 12 黄褐色土(10YR5/6 シルト。ロームブロック主体)
- 13 黄褐色土(10YR5/6 シルト。灰褐色シルトブロックを含む)
- 14 黄褐色土(10YR5/6 シルト。ロームブロック主体)
- 15 黄褐色土(10YR5/6 シルト。ロームブロック主体。14よりしまり強)
- 16 暗黄褐色土(10YR4/2 シルト。ローム細粒を含む)
- 17 黄褐色土(10YR5/6 粘土質シルト。ロームブロックを含む)
- 18 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを含む)
- 19 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。灰褐色シルトブロックを含む)
- 20 黄褐色土(10YR5/6 粘土質シルト。ローム主体)
- 21 黄褐色土(10YR5/6 粘土質シルト。ローム主体。6よりしまりあり)
- 22 灰黄褐色土(10YR4/2 シルト。ロームブロックを1より多く含む)
- 23 褐色土(10YR4/4 シルト。焼土粒、炭化物を多く含む)
- 24 黄褐色土(10YR5/6 粘土質シルト。ロームブロック主体)
- 25 灰黄褐色土(10YR4/2 シルト。炭化物を含む)
- 26 灰黄褐色土(10YR4/2 シルト。ロームブロックを多く含む)
- 27 灰黄褐色土(10YR4/2 シルト。ロームブロックを僅かに含む)
- 28 黄褐色土(10YR5/6 シルト。ロームブロック主体)
- 29 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを多く含む)

- 30 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロック主体)
- 31 暗灰褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを多く含む)
- 32 暗褐色土(10YR4/4 シルト。しまりなし)
- 33 暗褐色土(10YR4/4 シルト)
- 34 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを多く含む)
- 35 黄褐色土(10YR5/6 シルト。ロームブロック主体)
- 36 暗褐色土(10YR4/4 シルト。ロームブロックを含む)
- 37 黄褐色土(10YR5/6 シルト。ロームブロック主体)
- 38 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。9よりしまりなし)
- 39 黒褐色土(10YR2/3 シルト。ロームブロック細粒を含む)
- 40 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト質粘土。ロームブロックを含む)
- 41 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト質粘土。ロームブロックを含む)
- 42 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト質粘土。ロームブロック主体)
- 43 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを含む)
- 44 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを含む。43よりしまりあり)
- 45 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを多く含む)
- 46 黒褐色土(10YR2/3 シルト。ローム細粒を含む)
- 47 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを多く含む)
- 48 黄褐色土(10YR5/6 シルト。ロームブロック主体)
- 49 黄褐色土(10YR5/6 シルト。ロームブロック主体)
- 50 暗黄褐色土(10YR4/6 シルト。ロームブロックを含む)
- 51 灰黄褐色土(10YR4/2 シルト。焼土粒、炭化物、ローム細粒を多量に含む)
- 52 暗褐色土(10YR4/4 シルト。ロームブロックを多く含む)
- 53 暗黄褐色土(10YR4/2 シルト。ロームブロック主体)

※1~10層は柱痕跡、11~53層は掘方埋土

第99図 SB14(2)



第100図 SB14出土遺物

検出されていることから、床束や間仕切が存在していた可能性がある。長軸はN-80°-Wで、平面積は廂を含めると93.5㎡と推定される、東西棟の大型掘立柱建物跡である。

入側柱は柱掘方が径38～64cmの円形を呈し、柱抜取痕跡から柱の径は16～20cm前後と推定される。柱穴の深さは74cm～126cmで、底面標高をみると桁行はP1・2・5が55.52～55.6mであるのに対して、P3・4・6が55.22～55.34mとやや深くなる。梁行は西妻柱列のP6・7が55.1m前後でほぼ揃う。柱間寸法は桁行が2.1m～3.2mとばらつきがある。柱掘方埋土は、黄褐色ロームブロックが主体となる。

廂は、桁行5間(14.8m)、梁行3間(6.32m)で、西妻側は身舎の柱と位置が一致しない。柱掘方は径23～55cmの円形を呈し、入側柱に比べるとやや規模が小さい。柱痕跡、または柱抜取痕跡から柱の径は16～20cmに復元される。柱穴の深さは25～65cmで、底面の標高は55.66～56.08mと一定しない。柱間寸法は桁行が2.3～3.2m、梁行が1.7～2.1mで、入側柱との柱間寸法は1.1mと狭い。

遺物は、P5の柱抜取痕跡から土師質土器小皿124が完形の状態で出土している。柱を抜き取った後に意図的に埋納したものと考えられる。その他にP4から土師質土器鍋126が、P2から勝間田・亀山系甕127、土師質土器坏125が、P20から越前焼播鉢片128、P3から土師質土器小皿129がP5から鉄製品F23が、P11から椀形鍛冶滓F21、鉄製品F22が出土している。

本遺構の時期は、土師器小皿・坏は八峠編年中世Ⅲ期に相当する。越前焼播鉢128は、口縁端部を丸く収めるもので、木村編年Ⅲ期に該当するとみられる。以上のことから、おおむね13世紀から14世紀前半と推定される。

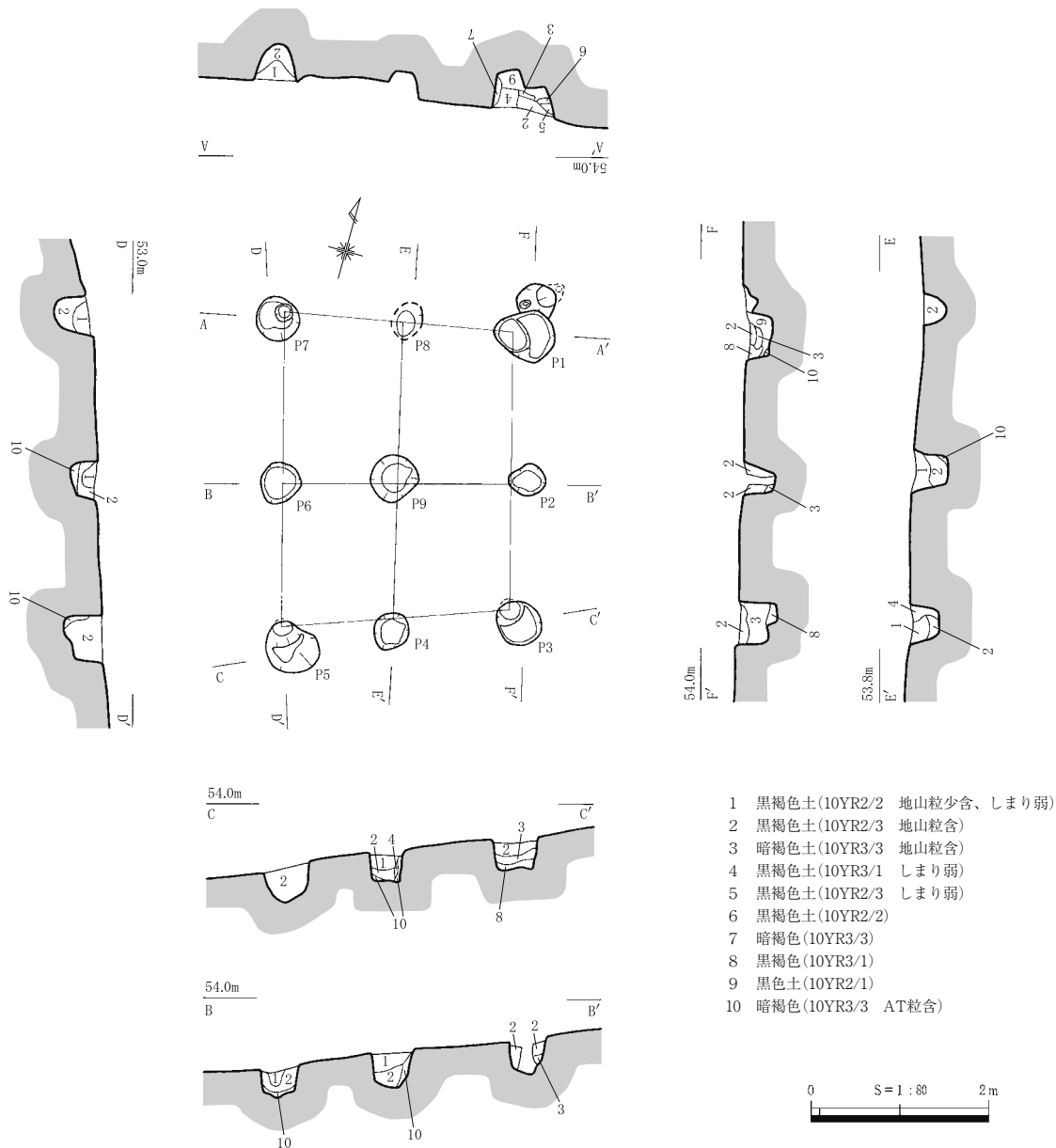
柱痕跡、または柱抜取痕跡から多量の焼土粒や炭化物が出土していることから、最終的に火災により廃絶したと考えられる。

SB15(第101図、表22、PL20)

1区北側のY2・Z2グリッドにまたがり、標高52.8～53.8m付近の緩斜面上に立地する。本遺構の柱穴P8に掘り込まれるSX4が北側に近接する。

桁行2間(3.14～3.56m)、梁行2間(2.58～2.59m)の総柱建物である。長軸はN-12°-Wとなり、平面積は約8.7㎡である。

柱間距離は、P1-P2間から時計回りに、1.72m、1.42m、1.33m、1.25m、1.62m、1.94m、1.35m、1.24



第101図 SB15

mを測り、P6 - P9間は1.29m、P9 - P2間は1.28mである。四隅の柱穴が大きく深いという特徴が挙げられる。底面レベルは南北方向には大きな差は認められないが、東西方向では西側のものほど低くなる。

P1・P2で柱痕跡が認められ、この部分の埋土は非常にしまりが弱いものであった。その他の柱穴では、明瞭な柱痕跡は確認できなかった。埋土は黒褐色土が中心であるがしまりが弱いものが多い。

遺物は出土していないが、SX4を掘り込んでいることから、本遺構の時期は中世以降と想定される。

表22 SB15ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	68 × 58 - 42	柱痕径 20cm
P2	42 × 36 - 36	柱痕径 11cm
P3	54 × 50 - 44	
P4	48 × 40 - 30	
P5	63 × 59 - 44	
P6	47 × 46 - 29	
P7	52 × 48 - 42	
P8	42 × 33 - 30	
P9	56 × 54 - 40	

3 柵列

SA2 (第102図、表23)

4区北西側のK5・4グリッドにまたがり、標高57.1～57.5m付近の平坦面に立地する。周辺にはピット群8が存在する。検出面は、ハードローム層中であつた。

9基の柱穴で構成されており、長さは4m、方位はN-55°-Eとなる。柱穴間の距離は6～28cmで、かなり密集した状態であつた。柱穴の規模は径40～23cm、深さ18～66cmを測る。

柱穴の多くを掘り下げてしまった時点で遺構と認識したため、埋土の正確な層序を確認できなかったが、埋土は、褐色から黒褐色土を主としたものであり、中世のピット群8の柱穴埋土と類似している。

遺物が出土しておらず、本遺構の時期は明確ではないが、埋土の状況から中世に属すると考えられる。

4 井戸

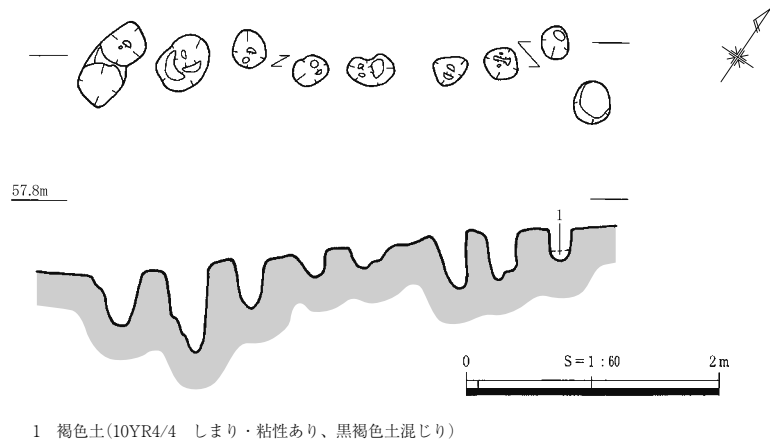
SE1 (第103～107図、PL.21・44～47)

3区北東部、S3グリッド、標高56.4mの平坦面に立地する。

平面形が、径2.46mの円形を呈する井戸である。深さは2.2mで、検出面から深さ0.65m付近に幅15cm程度のテラスが巡り、断面形は、二段掘りの逆台形状を呈する。上層から下層の上位で径50～60cmほどの礫が多量に出土していることから、本来、上部には石組が施されていた可能性がある。

湧水が著しかったため、土層断面を図化し得なかったが、埋土は上、下層に大別される。上層は焼土粒や炭化物を多く含む褐灰色系のシルト層で、下層はタケや草本類などの有機質遺物を多く含む砂質シルト層である。上下層とも多量の遺物を包含し、上層は土器や陶器類が、下層は木製品、加工材が主体を占める。

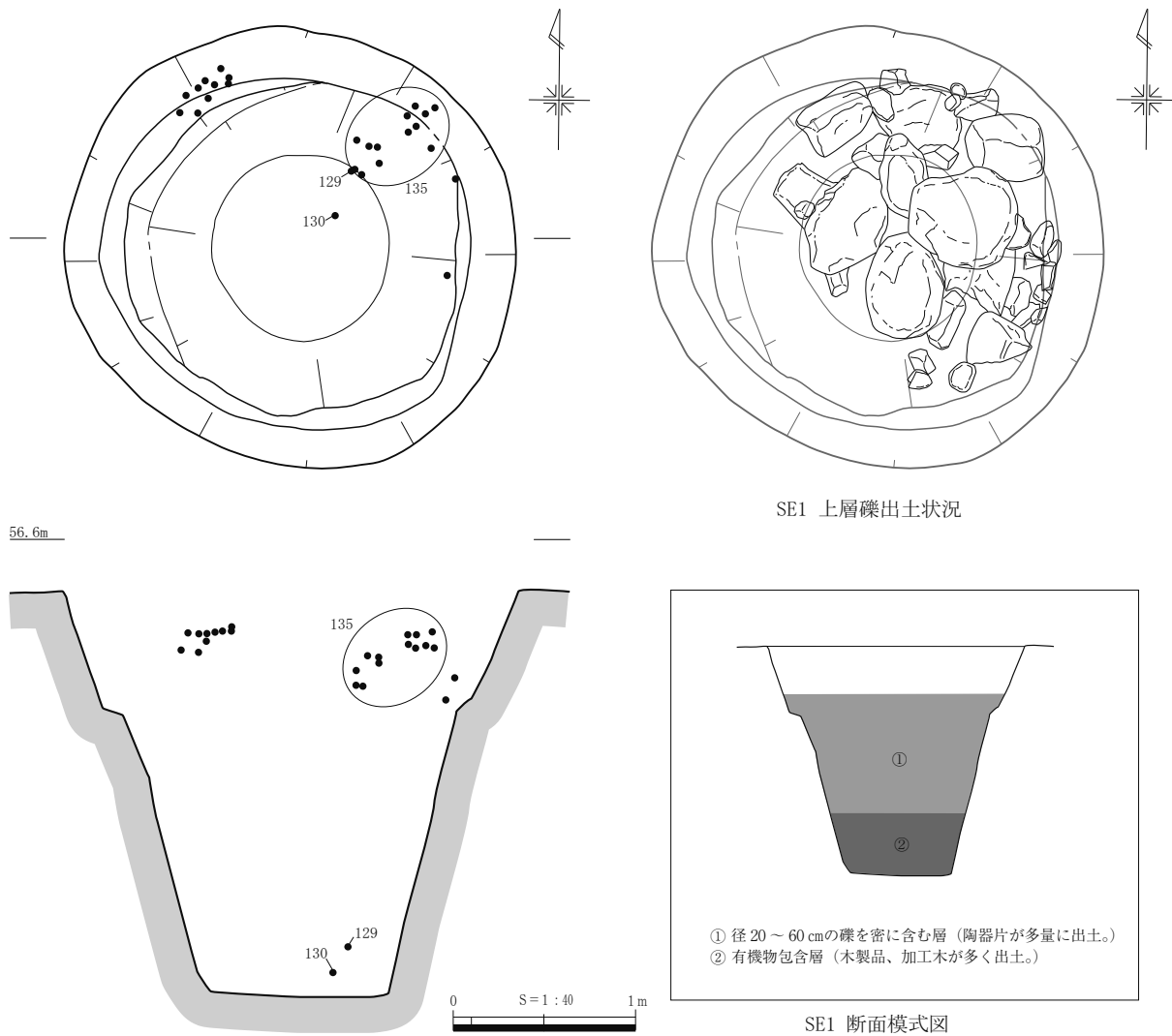
出土遺物については、130・131、W1～W33は埋土下層から出土した遺物である。130・131は土師質土器坏で、いずれも完形品である。W1～W33は木製品である。W1～12は箸状木製品で、加工が比較的丁寧なもの(W1～3・5・6・8・10)と粗雑なもの(W9・11)がみられる。W10、11は完形品で、全長はW10が22cm、W11が22.7cmである。W14は桶底で、表面に細かい擦痕がみられる。W15は曲物の底板などの可能性があり、下手側短軸方向に2対の穿孔が並んでおり、緊縛した際の樹



第102図 SA2

表23 SA2ピット一覧表

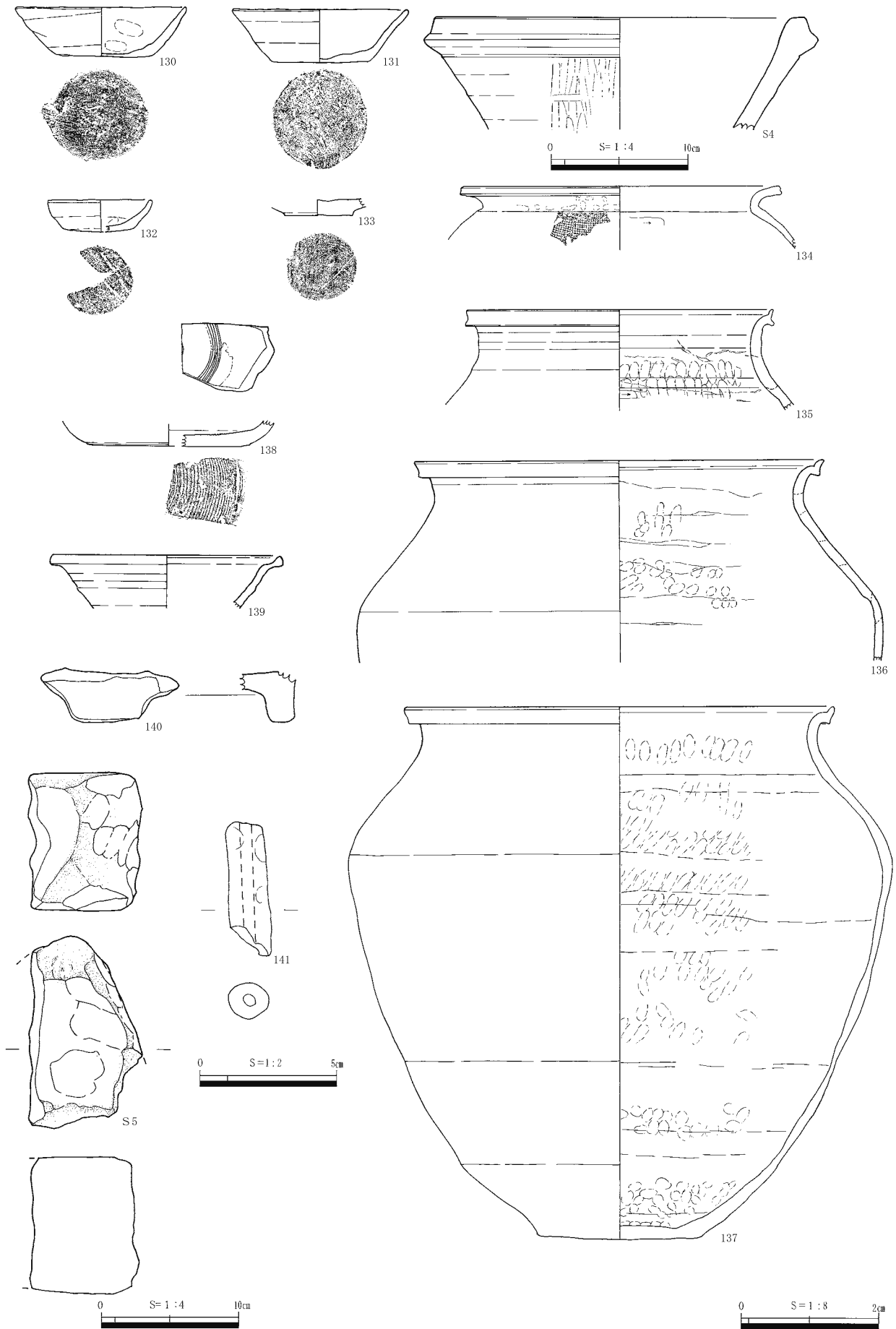
ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ) cm	備考
P1	25 × 21 - 24	
P2	32 × 29 - 50	
P3	29 × 27 - 37	
P4	25 × 23 - 46	
P5	31 × 27 - 18	
P6	25 × 25 - 21	
P7	29 × 29 - 38	
P8	45 × 35 - 66	
P9	35 × 33 - 41	



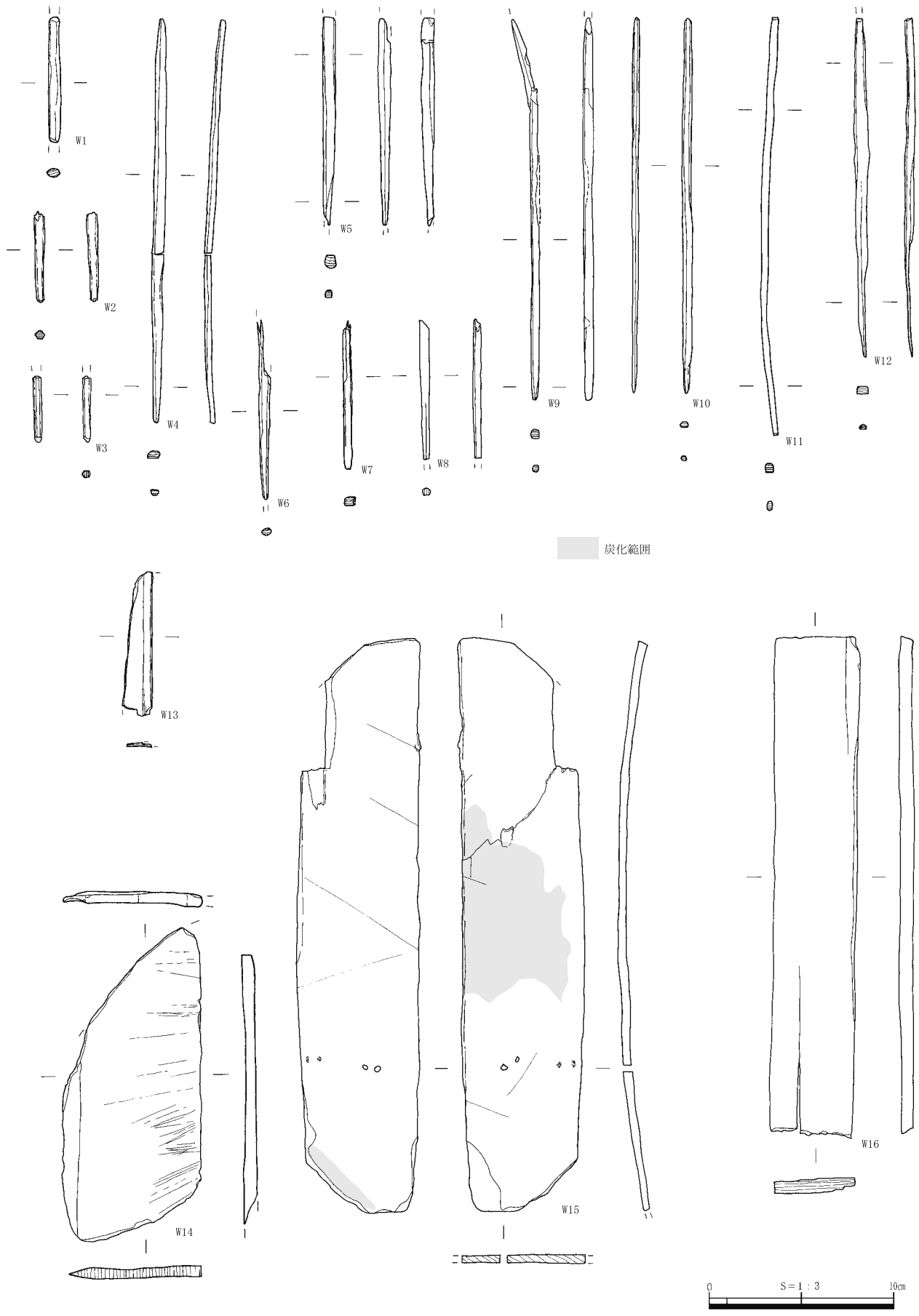
第103図 SE1

皮紐が残る。W24は板状の紡錘車と考えられ、径は4.4cmに復元される。W25、26は円形の板材で、柄杓など小型容器の底板となる可能性がある。W30は柱材の転用材、W32は有頭状の棒材で、垂木の可能性がある。

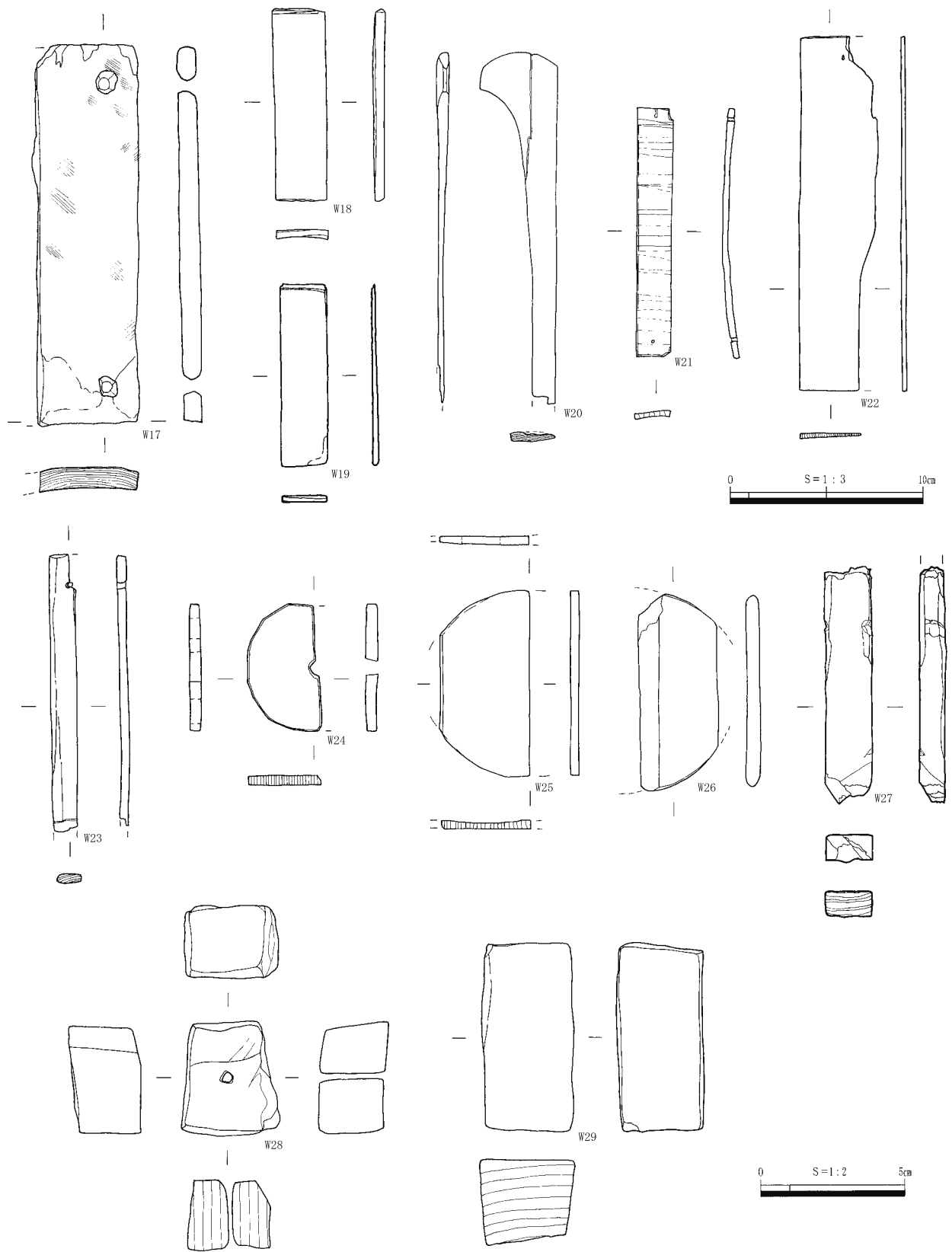
131 ~ 140、S4・S5は上層から出土した遺物である。132・133は土師質土器小皿である。134は勝間田焼もしくは亀山焼系の甕で、頸部の屈曲が強い。135 ~ 137は越前焼甕である。135は口縁部の断面形がやや横T字状をなす。口径が45.2cmで、他の135・136に比べ一回りサイズが小さい。口縁部から肩部にかけての外面には自然釉がかかり、肩部にはタタキ様の圧痕が残る。136・137は受け口状の口縁部を持ち、端部はやや外反する。136はSK17出土資料と接合し、色調が内外面とも灰色を呈する。肩部にはヘラ描きによる記号が施文されている。137は完形に復元できた個体で、口径が63cm、底径が24cm、高さが78cmを測る。越前焼甕はいずれも木村編年Ⅲ - 2期に該当する。138・139は瀬戸窯製品の折縁中皿で、138は底部の切り離しが回転糸切りである。138は藤沢編年古瀬戸様式中期Ⅲ期もしくはⅣ期で、139は古瀬戸様式中期Ⅲ期にあたる。140は瓦質土器で、火鉢の脚部とみられる。141は土錘、S4は滑石製石鍋で、鏝は垂れ下がり、断面形は不等辺台形を呈する。外面は丁寧なケズリが施され、内面は平滑度が高い。木戸分類Ⅲ - C類に該当するとみられる。S5は擦石、F26 ~ F28



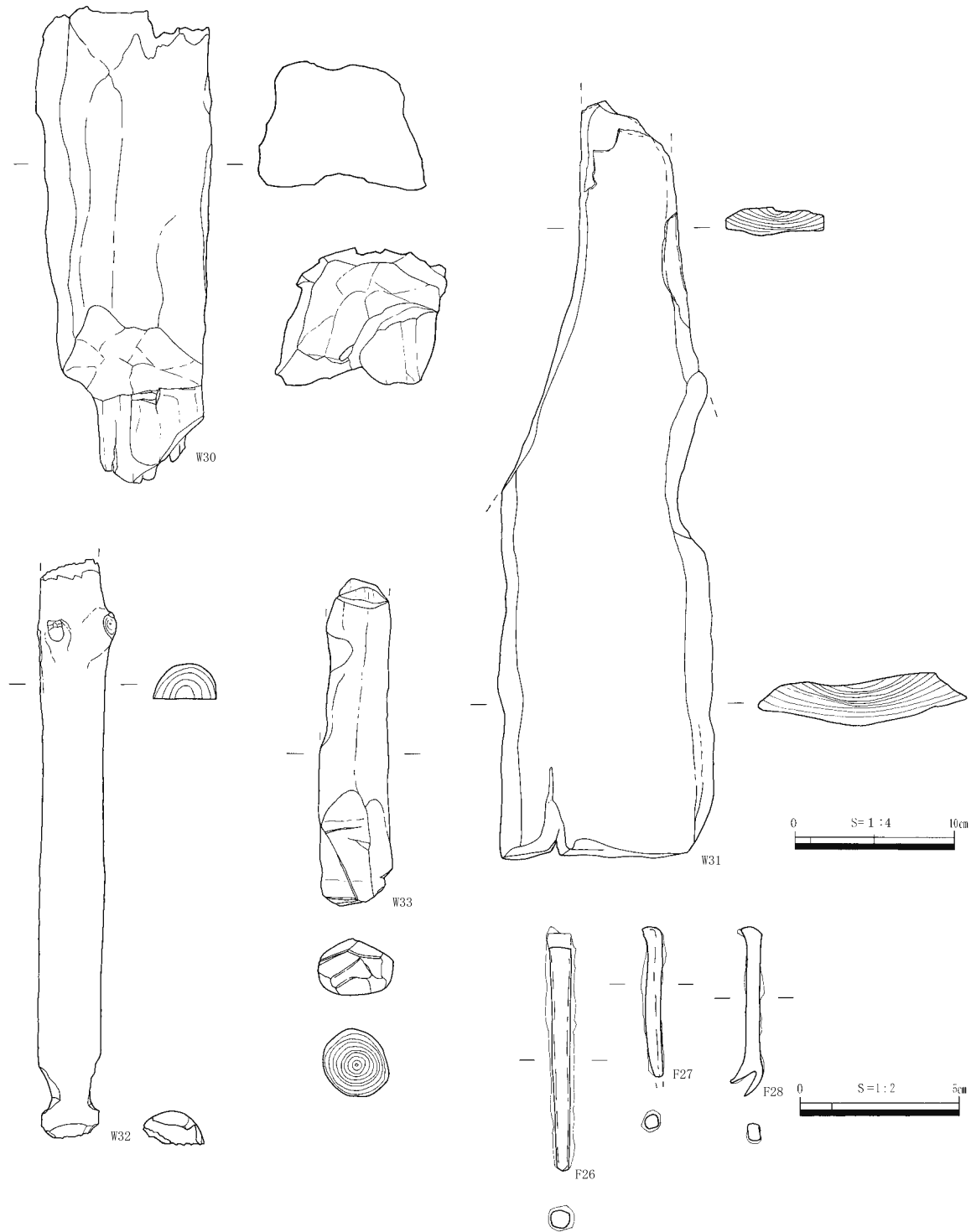
第104図 SE 1 出土遺物(1)



第105図 SE 1 出土遺物(2)



第106図 SE 1 出土遺物(3)



第107図 SE 1 出土遺物(4)

は鉄釘である。

出土遺物の時期は、下層から出土した土師質土器坏が八峠編年中世Ⅲ期、13世紀から14世紀初頭、上層から出土した陶器類、滑石製石鍋が概ね13世紀末から14世紀中頃に位置づけられる。上層から出土した炭化材によるAMS年代測定でも $601 \pm 19\text{yrBP}$ という結果が得られており、遺物の年代観とほぼ合致する(第4章)。したがって、本遺構の時期は13世紀から14世紀中頃の範疇で捉えることができる。

上層の出土遺物はいずれも二次的に火を受けた痕跡があり、礫も被熱により破損、剥離している

ものが多く、表面の赤変、煤の付着も著しい。近接するSB14を含む建物群は火災により倒壊したと考えられ、本遺構もそれに伴って廃絶した可能性が高い。

SE2 (第108・109図、PL.21・48・61・73)

3区北東側のP3・4グリッドにあり、標高56.2m付近の平坦面に立地する。

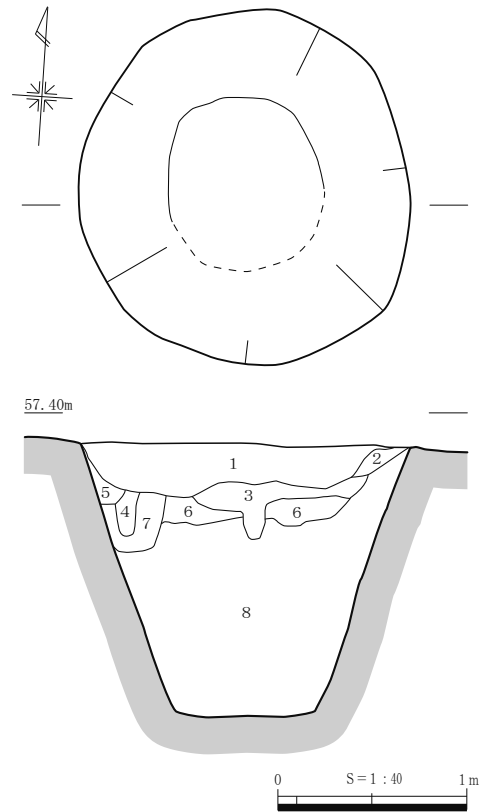
平面形は円形を呈し、径約1.7m、深さ約1.4mを測る。底面はほぼ平坦で、断面形は、逆台形状を呈する。素掘りの井戸である。底面からの湧水が著しかった。

埋土は、暗茶褐色土、暗灰土など粘性の強い8層からなる。8層は厚く堆積しており、一気に埋め戻された可能性がある。

埋土上層の1層から土師質土器小皿143が出土した。また、井戸底部直上の8層からも同時期と考えられる土師質土器小皿142・144・147、土師質土器杯148と敲石S6を検出した。その他、埋土中から土師質土器小皿145・146、土師質土器杯149～151、足部寄りの鉄釘片F29が出土した。

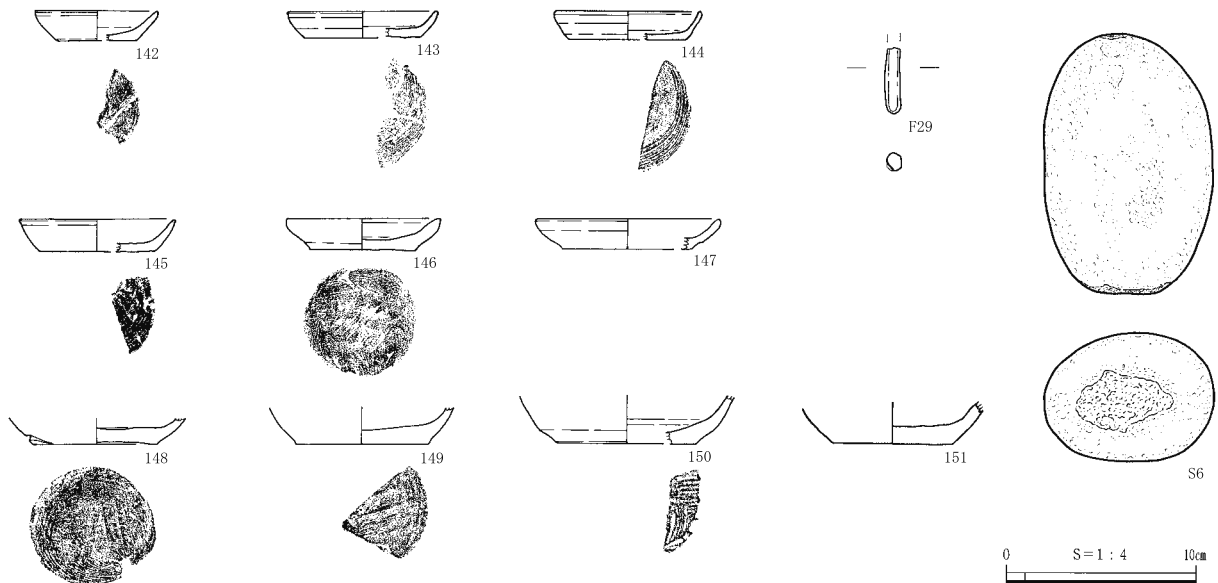
出土遺物のうち、土師質土器小皿、杯は八峠編年中世Ⅲ期に相当し、13世紀前半から14世紀ものと考えられ、本遺構もこの時期に埋没していると考えられる。

埋没状況や、1層と8層の出土遺物に時期差がみられない。このことからSE2は、短期間のうちに埋め戻されたと考えられる。



- 1 暗茶褐色土(5Y2/4 粘質 細かい地山土まじる)
- 2 暗灰茶色土(2.5Y2/3 粘質 細かい地山土まじる)
- 3 橙斑灰茶色土(10YR3/1 粘質 砂まじる)
- 4 淡橙色土(5YR4/6 砂質)
- 5 暗灰色土(粘質 土器含む)
- 6 暗灰褐色土(10YR1.7/1 粘質)
- 7 暗青灰色土(10YR2/3 粘質)
- 8 暗灰色土(7.5YR1.7/1 粘質)

第108図 SE2



第109図 SE2出土遺物

5 土墳墓

SK38(第110・111図、PL.24・48・61)

3区北東部のR 3・4グリッドにあり、標高56.5mの平坦面に位置する。SK39と重複しているが、土層の観察から、SK39に先行することを確認した。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.26m、短軸0.75mを測る。深さは0.36mで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

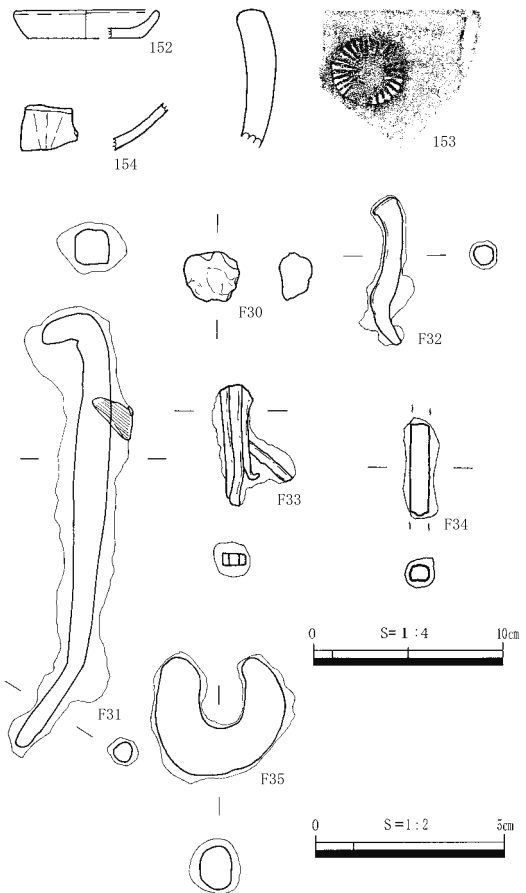
埋土は6層に細分され、下層の8・9層は炭化物を密に含む層である。

遺物は、底面から5cmほど浮いた状態で大型の鉄釘F31が出土している。その他に埋土中から土師質土器小皿152、瓦質土器火鉢153、龍泉窯系青磁碗B 1類154、炉壁F30、鉄釘F32～F34、環状鉄製品F35が出土している。153は奈良火鉢で、外面に菊花文のスタンプが押印されている。

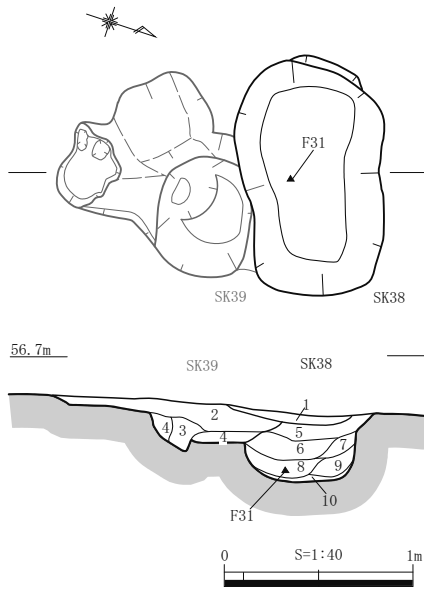
時期は、土師質土器が八峠編年中世Ⅲ期に相当すると考えられ、13世紀から14世紀初頭と推定できる。下層から出土した炭化材によるAMS年代測定では、 623 ± 21 yrBP、 644 ± 19 yrBPの結果が得られており、出土遺物の年代観とほぼ合致する

(第4章参照)。

遺構の規模や形状、下層



第111図 SK38 出土遺物



- 1 黒褐色粘質土(10YR3/1)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)を含む
- 2 黒褐色粘質土(10YR3/1)と黄褐色ロームブロック(10YR5/6)の混濁土
- 3 黒褐色粘質土(10YR3/1)に黄褐色ローム細粒が混じる
- 4 黄褐色ロームブロック(10YR5/6)に黒褐色粘質土(10YR3/1)が混じる
- 5 黒褐色粘土(10YR3/2)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)が混じる
- 6 暗褐色粘質土(10YR3/3)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が多く混じる
- 7 黒褐色粘質土(10YR3/2)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が少量混じる。炭化物が極少量含む
- 8 黒褐色粘土(10YR3/2)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が少量、炭化物が多量に混じる
- 9 暗褐色粘土(10YR3/3)と黄褐色ロームブロック(10YR5/6)の混濁土
- 10 黄褐色ロームブロック(10YR5/6)に暗褐色粘土(10YR3/3)が混じる

第110図 SK38

に炭が充填されることから、本遺構は土墳墓の可能性が高く、土層断面等で棺痕跡や焼土面は確認されていないことから、直葬であったと考えられる。

6 土坑

SK13(第112図)

3区北東部のR 2グリッドにあり、標高56.3mの平坦面に位置する。

平面形は楕円形を呈し、長軸0.86m、短軸0.83m、深さは0.61mを測る。断面形は二段掘りとなる。

埋土は7層に細分でき、焼土粒や炭化物を密に含む。

出土遺物はないが、底面からやや浮いた位置から径30cm程度の礫が出土している。

時期は、埋土の特徴から13世紀から14世紀前半と考えられる。埋土の堆積状況や柱痕跡が確認されなかったことから、土坑として取り扱ったが、周囲に柱穴が多数存

在することや壁面の立ち上がりが比較的急であることから柱穴である可能性がある。

SK14(第113・114図、PL.21・61)

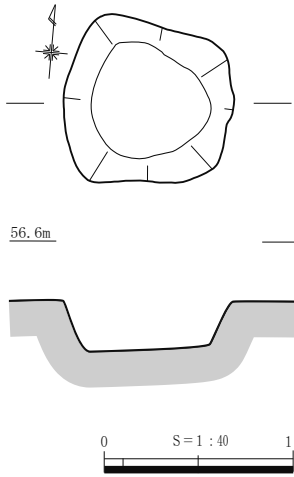
3区北東部のR3グリッドにあり、標高56.4mの平坦面に位置する。

平面形は長軸0.9m、短軸0.86mのやや歪な隅丸方形を呈する。検出面からの深さは30cmで、断面形は逆台形状である。

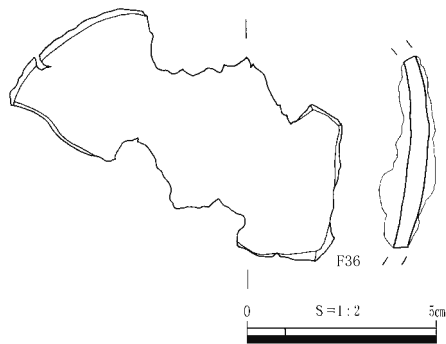
埋土は黒褐色系のシルト層である。

遺物は、埋土中から越前焼甕が出土しており、SE1の135と接合した。また、鑄鉄製鍋片F36が出土している。

時期は、出土土器から14世紀前半と考えられる。遺構の性格は不明である。



第113図 SK14

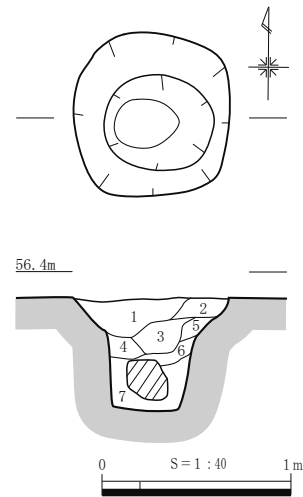


第114図 SK14出土遺物

土師質土器154は八峠編年中世Ⅲ期に相当することから、13世紀から14世紀前半と考えられる。遺構の性格は不明である。

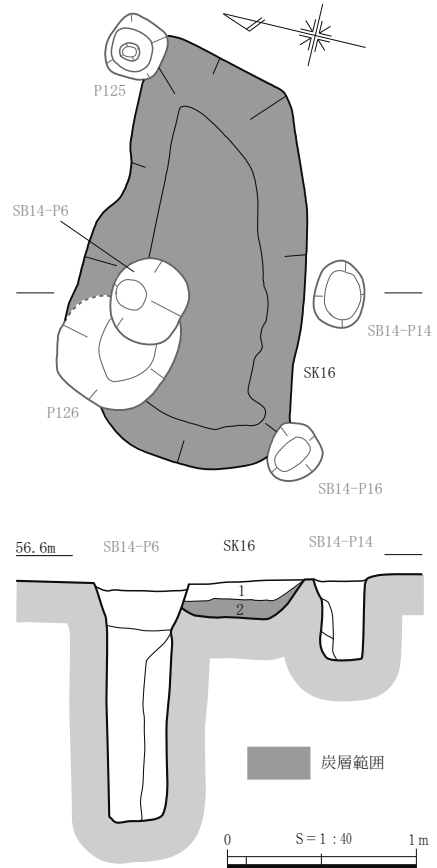
SK17(第117・118図、PL.48・61)

3区北東部のS2・R2グリッドにあり、標高56.2mの平坦面



- 1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)焼土粒、炭化物を密に含む
- 2 灰黄褐色シルト(10YR4/2)焼土粒、炭化物を密に含む
1よりしまり弱
- 3 灰褐色シルト(10YR4/1)焼土粒、炭化物を密に含む
1、2よりしまり弱
- 4 暗黄褐色シルト(10YR4/6)ロームブロックを含む
- 5 褐灰色シルト(10YR4/1)ロームブロックを含む
- 6 灰黄褐色シルト(10YR4/2)ロームブロック、炭化物を含む
- 7 灰黄褐色シルト(10YR4/2)6より炭化物を多く含む

第112図 SK13



- 1 暗黄褐色シルト(10YR5/6)ロームブロック主体
- 2 黒褐色シルト(10YR1.7/1)炭層

第115図 SK16

SK16(第115・116図、PL.24・48・61)

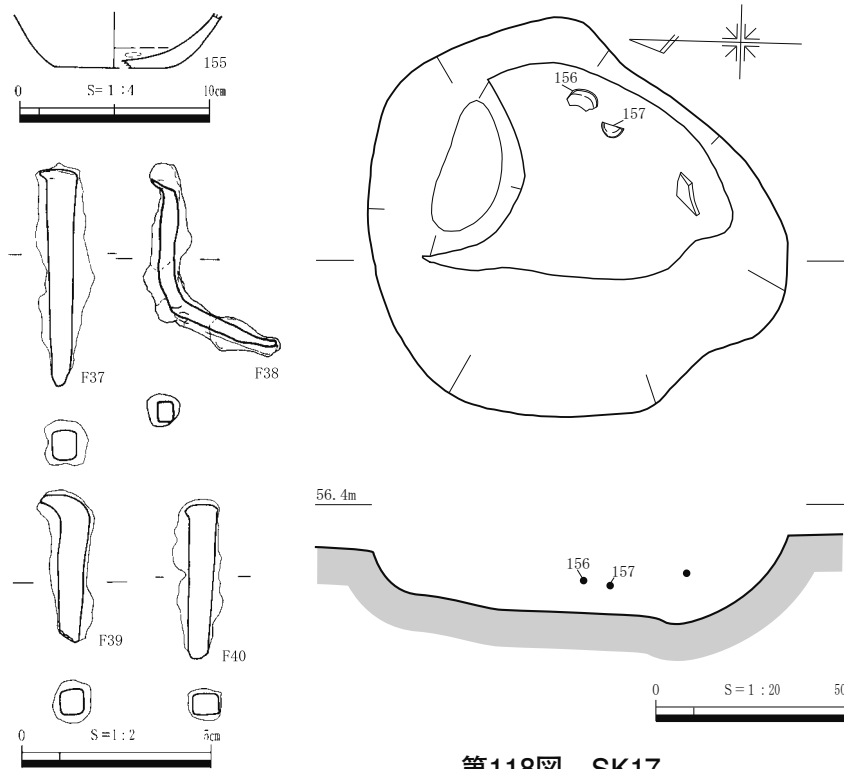
3区北東部のT2グリッドにあり、標高56.5mの平坦面に位置する。SB14と重複しているが、土層の観察等によりSB14に先行する遺構と判明した。

平面形はやや歪な長方形を呈し、長軸2.2m、短軸1.1m、深さ0.2mを測る。断面形は、逆台形状を呈する。

埋土は2層で、下層は炭層である。

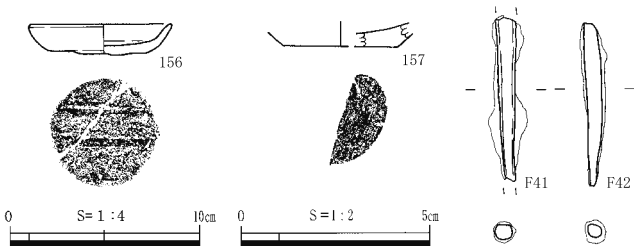
遺物は、埋土中から土師質土器坏155、鉄釘F37～F40が出土している。本遺構の周囲では柱穴を多数検出しており、鉄釘は本来それらの柱穴で構成される建物に使用されたものと考えられる。

遺構の時期については、



第118図 SK17

第116図 SK16出土遺物



第117図 SK17出土遺物

SK18(第119・120図、PL.21・61・65)

3区北東部のS 2グリッドにあり、標高56.3mの平坦面に位置する。SB14と重複しているが、土層の観察等からSB14に後出するものである。

平面形は、長方形を呈し、長軸1.74m、短軸1.0m、深さ0.26mを測る。断面形は、逆台形状を呈する。

埋土は灰黄褐色シルトの単層で、焼土粒や炭を密に含んでいる。

遺物は、埋土中から炉壁片F43、鉄釘F44、鑄鉄製飾り金具F45が出土している。

時期を特定できる遺物が出土していないため正確な時期は不明であるが、埋土や遺構の重複関係から13世紀から14世紀前半と推定できる。遺構の性格は不明である。

SK24(第121図、PL.22)

3区北東部のR 2グリッドにあり、標高56.3mの平坦面に位置

に位置する。

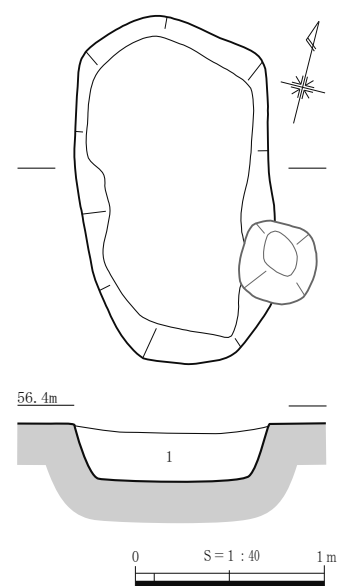
平面形は、歪な楕円形を呈し、長軸1.16m、短軸0.95m、検出面からの深さは最大0.22mを測る。底面は平坦ではない。

埋土は灰黄褐色のシルト層で、焼土粒や炭化物を多量に含む。

出土遺物には埋土中から土師質土器小皿156、坏157、越前焼甕、鉄釘F41・F42が出土している。越前焼甕はSE 1出土の137と接合した。土師質土器小皿156の底面には板目状の圧痕がみられる。鉄釘は本

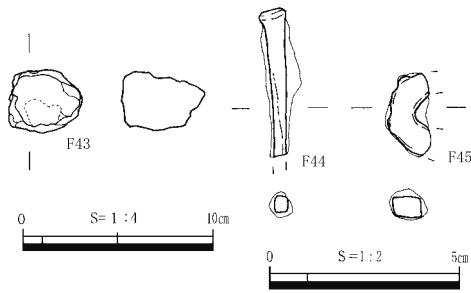
来、周囲で検出された柱穴群で構成される建物に使用されたものと考えられる。

遺構の時期については、土師質土器156は、八峠編年中世Ⅲ期に相当することから、13世紀から14世紀初頭と考えられる。遺構の性格は不明である。

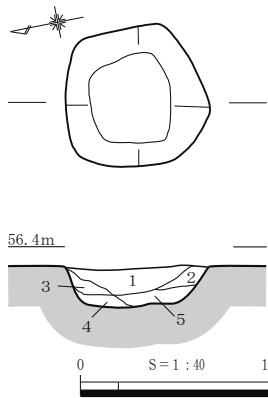


1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)焼土粒、炭化物を密に含む

第119図 SK18



第120図 SK18出土遺物



- 1 灰黄褐色シルト(10YR4/2)焼土粒、炭化物主体 しまり強
- 2 灰黄褐色シルト(10YR4/2)
- 3 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 2よりしまり弱
- 4 灰黄褐色シルト(10YR4/2)ロームブロックを含む
- 5 灰黄褐色シルト(10YR4/2)黒色シルトブロックを含む

第121図 SK24

層位から中世の遺構と考えられるが、性格は不明である。これら3基の土坑は、関連する遺構と考えられる。

する。

平面形は、やや歪な円形を呈し、長軸0.78m、短軸0.74m、深さ0.2mを測る。断面形は、逆台形を呈する。

埋土は、灰黄褐色シルト層で5層に細分される。

遺物は出土していない。

時期は埋土や周囲の遺構検出状況から13世紀から14世紀前半と考えられる。遺構の性格は不明である。

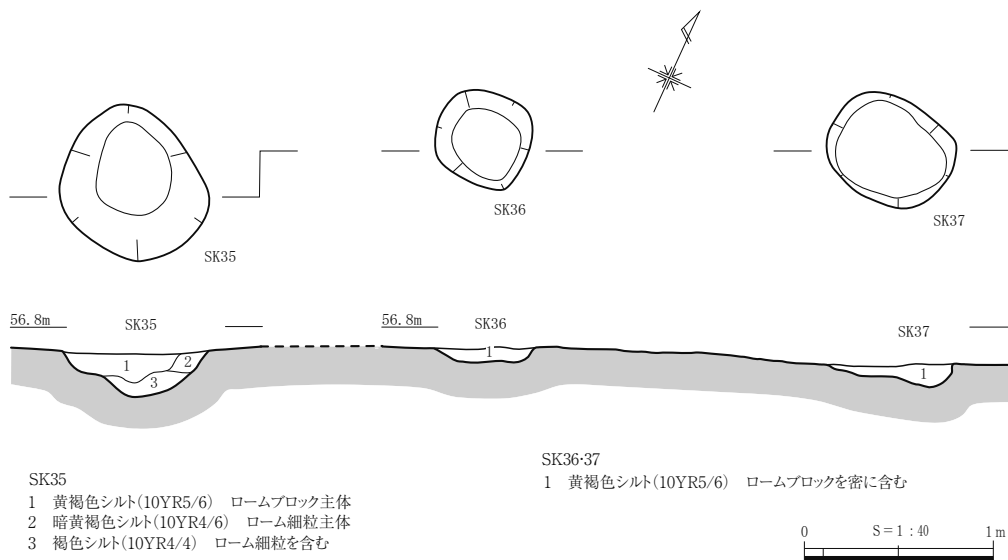
SK35・36・37(第6・122図、PL.24)

3区東側のQ4グリッドにあり、標高56.7mの谷地形の緩斜面に位置する。2-2層上面で検出された遺構で、上層は一部が中世の遺物包含層1-2層によって覆われている。これら3基は西からSK35・SK36・SK37と東西方向に並んでおり、距離はSK35とSK36が1.9m、SK36とSK37が2.1mである。

平面形は、いずれも楕円形を呈し、規模はSK35が長軸0.81m、短軸0.7m、SK36が長軸0.51m、短軸0.49m、SK37が長軸0.67m、短軸0.55mである。深さはSK36、37が0.1mほどで、SK35が0.23mとやや深い。

埋土は、いずれも地山のロームブロックを主体とする黄褐色土または褐色土である。

遺物は出土していない。



- SK35
- 1 黄褐色シルト(10YR5/6) ロームブロック主体
 - 2 暗黄褐色シルト(10YR4/6) ローム細粒主体
 - 3 褐色シルト(10YR4/4) ローム細粒を含む

- SK36-37
- 1 黄褐色シルト(10YR5/6) ロームブロックを密に含む

第122図 SK35・36・37

SK39(第123図、PL.22)

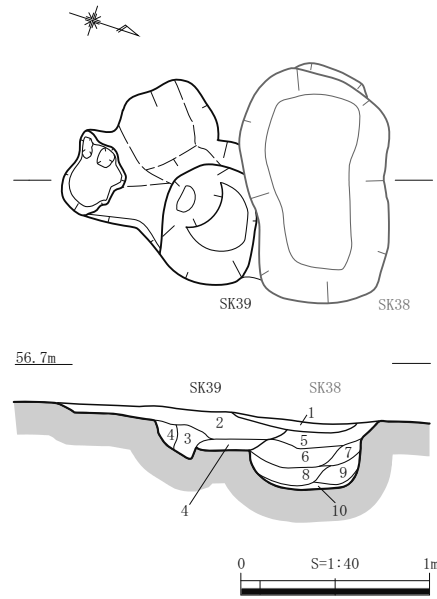
3区北東部のR 4グリッドにあり、標高56.5mの平坦面に位置する。SK38と重複しているが、土層断面等の観察によりSK38に後出することが判明した。

平面形は、不整楕円形を呈し、長軸1.11m、短軸0.94m、深さ0.22mを測る。底面は平坦ではない。

埋土は4層に細分される。

遺物は出土していない。

時期はSK38との重複関係から14世紀以降と考えられ、中世の範疇に収まると考えられる。性格は不明である。



SK40(第124・125図、PL.22)

3区北東部のR 4グリッドにあり、標高56.5mの平坦面に位置する。

平面形は長軸0.91m、短軸0.74mの不整形を呈する。深さは0.25mで、断面形も歪である。

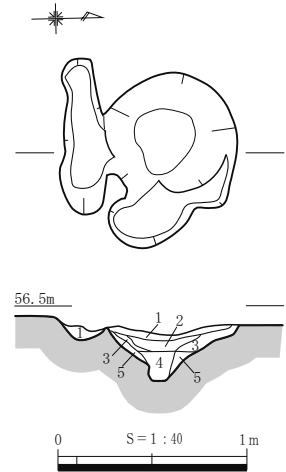
埋土は5層に細分できる。

埋土中から、鉄釘F46が出土している。

時期を決定する遺物が出土していないが、埋土の特徴から中世の遺構と考えられる。性格は不明である。

- 1 黒褐色粘質土(10YR3/1)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)を含む
- 2 黒褐色粘質土(10YR3/1)と黄褐色ロームブロック(10YR5/6)の混濁土
- 3 黒褐色粘質土(10YR3/1)に黄褐色ローム細粒が混じる
- 4 黄褐色ロームブロック(10YR5/6)に黒褐色粘質土(10YR3/1)が混じる
- 5 黒褐色粘土(10YR3/2)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)が混じる
- 6 暗褐色粘質土(10YR3/3)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が多く混じる
- 7 黒褐色粘質土(10YR3/2)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が少量混じる。炭化物が極少量含む
- 8 黒褐色粘土(10YR3/2)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が少量、炭化物が少量に混じる
- 9 黒褐色粘土(10YR3/3)と黄褐色ロームブロック(10YR5/6)の混濁土
- 10 黄褐色ロームブロック(10YR5/6)に暗褐色粘土(10YR3/3)が混じる

第123図 SK39



SK41(第126図、PL.22)

3区北東部のR 3グリッドにあり、標高56.5mの平坦面に位置する。

平面形は、不整楕円形を呈し、長軸0.97m、短軸0.85m、深さ0.39mを測る。底面には凹凸があり、一定しない。

埋土は3層に細分される。

遺物は出土していないが、埋土の特徴から中世の遺構と考えられる。性格は不明である。

SK42(第127図)

3区北東部のS 3グリッドにあり、標高56.5mの平坦面に位置する。

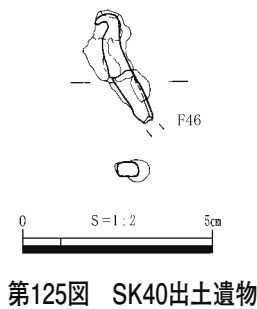
平面形は、楕円形を呈し、長軸0.64m、短軸0.52m、深さは0.18mを測る。断面形は皿状を呈す。

埋土は7層に細分できる。

遺物は出土していないが、埋土の特徴から中世の遺構と考えられる。性格は不明である。

- 1 黒褐色土(10YR3/1 粘質)
- 2 1と黄褐色ロームブロック(10YR5/6)の混濁土
- 3 1に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が多く混じる
- 4 黒色土(10YR2/1 粘土)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が少量混じる
- 5 黒色土(10YR2/1 粘土)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が多く混じる

第124図 SK40

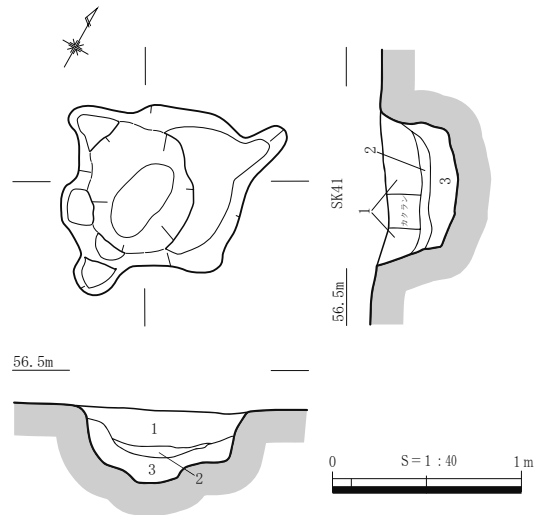


第125図 SK40出土遺物

SK43(第128図、PL.22)

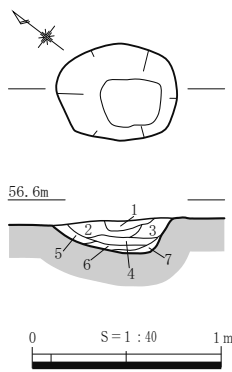
3区北東部のS4グリッドにあり、標高56.5mの平坦面に立地する。

平面形は円形を呈し、径0.5m、深さ0.25mを測る。断面形は逆台形状を呈す。



- 1 黒褐色粘質土(10YR3/2)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)が多く混じる。炭化物を少量含む
- 2 黒褐色粘質土(10YR3/2)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が多く混じる
- 3 黄褐色ロームブロック土(10YR5/6)に褐色粘土(10YR4/1)が混じる

第126図 SK41



- 1 褐色土(10YR4/1 粘質)
- 2 黒褐色土(10YR3/1 粘質)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)を多量に含む
- 3 黒褐色土(10YR3/1 粘質)と黄褐色ローム細粒(10YR5/6)の混濁土
- 4 黒褐色土(10YR3/2 粘質)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)が多量に含む
- 5 黒褐色土(10YR3/2 粘質)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)が多量に含む
- 6 褐色土(10YR3/2 粘質)に黄褐色ローム細粒(10YR5/6)が少量含む
- 7 褐色土(10YR3/2 粘質)

第127図 SK42

埋土は、黄褐色砂質土の単層である。

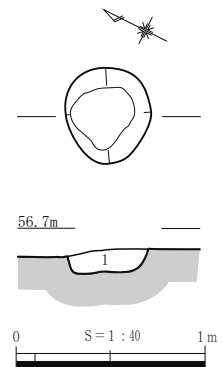
遺物は出土していないが、層位及び埋土の特徴などから中世の遺構と考えられる。性格は不明である。

SK44・45(第129図、PL.22)

3区北東部のT3グリッド

にあり、標高56.5mの平坦面に立地する。SK44とSK45が近接して造られている。SK44とSK45は1mの間隔をとっている。

SK44は、平面形は長楕円形を呈し、長軸1.44m、短軸0.62m、深さ0.13mを測る。断面形は、浅い皿状を呈す。



- 1 黄褐色砂質土(10YR5/6)に灰黄褐色砂質土(10YR4/2)が混じる

第128図 SK43

埋土は、単層であり、黄褐色ロームブロックに褐色粘質土が混じる層である。

SK45は、平面形は長楕円形を呈し、長軸1.54m、短軸0.79m、深さはわずかに9cmを測る。断面は、浅い皿状を呈す。

埋土は、単層であり、黄褐色ロームブロックに褐色粘質土が混じる層である。

SK44・45とも遺物が出土していないが、埋土の色調から中世の遺構と考えられる。SK44とSK45は1mの距離を置き、南北に並んでおり、規模や形態も類似することから、関連性の高い遺構と考えられる。性格は不明である。

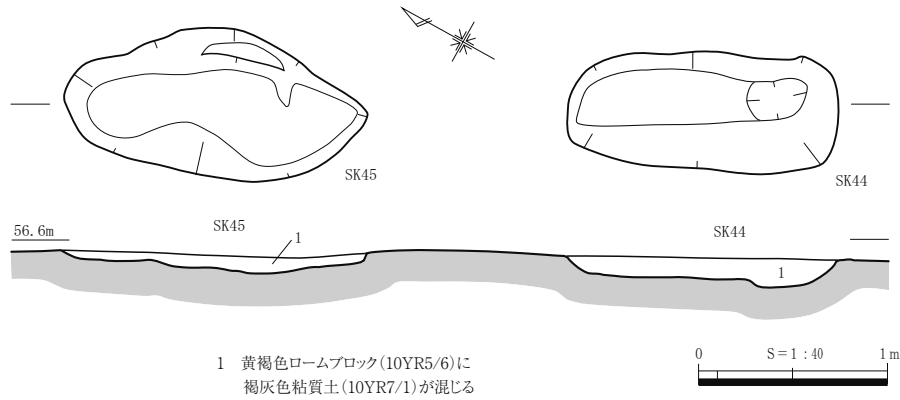
SK50(第130図、PL.23)

4区北側のJ5グリッドにあり、標高約57.5mの平坦面に立地し、ピット群8の中に存在する。

平面形は隅丸方形を呈し、検出面で長軸0.65m、短軸0.6m、深さ0.19mを測る。底面は不整形で、西側に凹凸がある。

埋土は、暗褐色から黒褐色土だが、最下層ではにぶい黄褐色を呈する。

遺物は出土しておらず本遺構の時期は明確ではないが、ピット群8と埋土が似ることから、本遺構も中世に属するものと考えられる。性格は不明である。

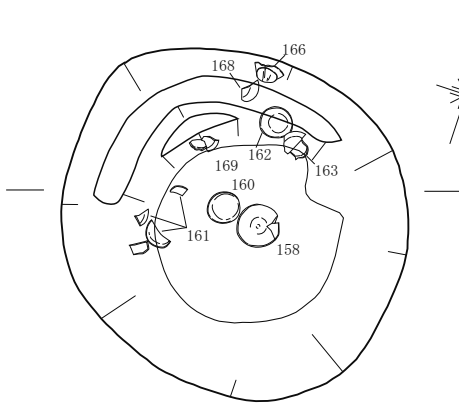


1 黄褐色ロームブロック(10YR5/6)に
褐灰色粘質土(10YR7/1)が混じる

第129図 SK44・45

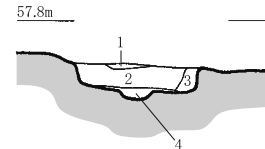
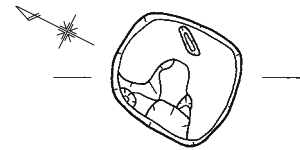
SK52(第131・132図、PL49・53・61)

3区北東部のS2グリッドにあり、標高56.3mの平坦面に立地する。



平面形は円形を呈し、径0.92m、深さ0.32mを測る。底面は平坦ではない。北西側は幅10cmほどのテラスが巡っている。

埋土は4層に分層でき、焼土粒や炭化物を多く含んでいる。

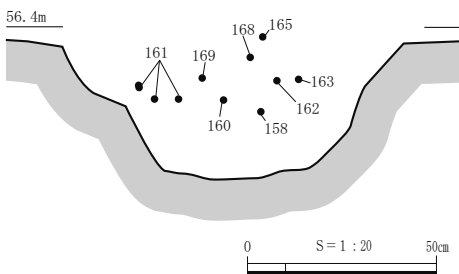
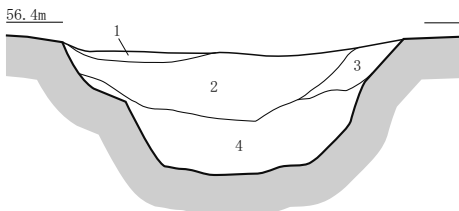


1 黒褐色土(7.5YR3/2 粘性なし、炭化物少含)
2 黒褐色土(7.5YR2/2 地山粒・炭化物少含)
3 暗褐色土(10YR3/3 粘性あり、地山混じり)
4 にぶい黄褐色土(10YR5/4 粘性あり、2層混じり)

第130図 SK50

遺物は1～3層から土師質土器杯158・159、小皿160～173、刀子F47が出土している。土器は土坑内に一括廃棄されたものと考えられる。

土師質土器は、八峠編年中世Ⅲ期に相当することから、13世紀から14世紀前半の土器廃棄土坑と考えられる。



1 暗褐色シルト(10YR4/6)焼土粒、炭化物を密に含む
2 暗黄褐色シルト(10YR5/6)炭化物、焼土粒を含む
3 黄褐色シルト質粘土(10YR5/6)炭化材、焼土粒を含む
4 黄褐色シルト質粘土(10YR5/6)ロームブロック主体

第131図 SK52

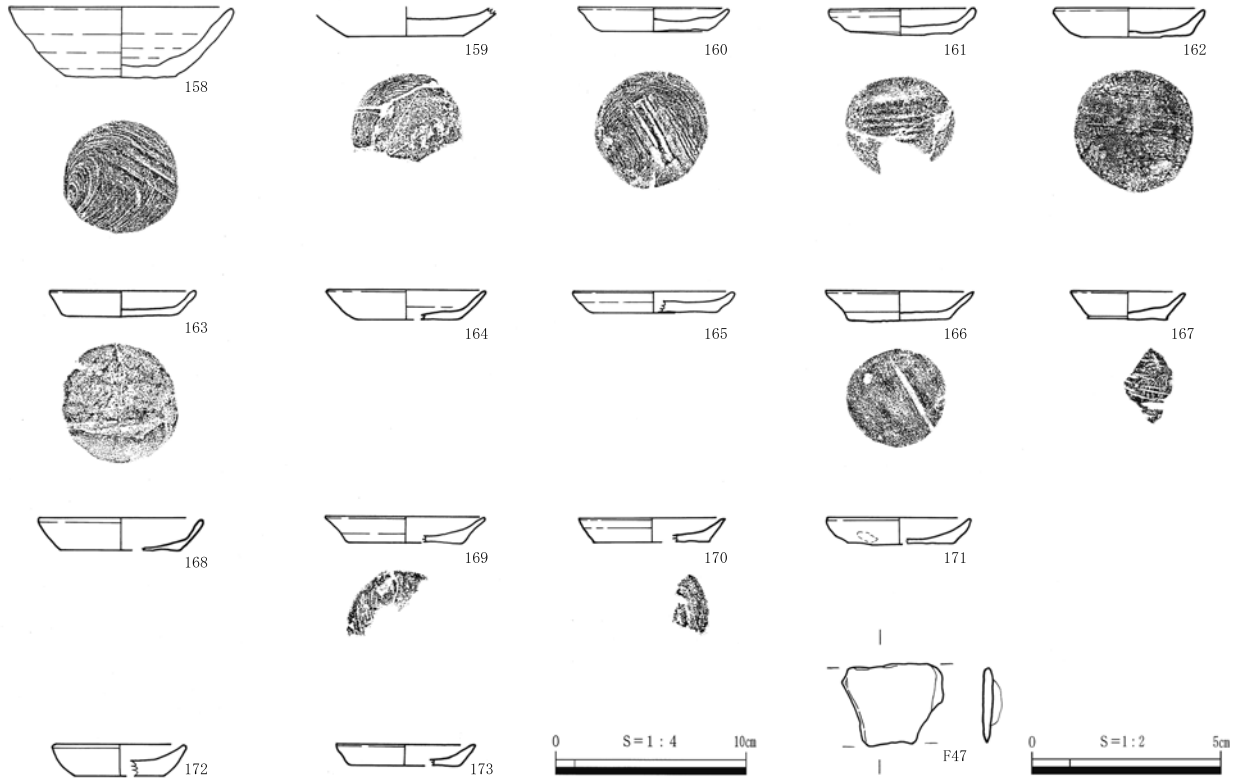
SK54(第133図、PL.23)

4区南西側のK8グリッドとK9グリッドにまたがっており、標高約57.3mの平坦面で確認した。中世の遺物包含層の黒色土中で検出した。南側にはSK55が近接する。

平面形は、不整楕円形を呈し、長軸0.88m、短軸0.86m、深さ最大0.18mを測る。断面形は、逆台形を呈す。

埋土は、黒褐色土、黒色土の2層を確認した。

遺物が出土していないが、層位から中世ごろの遺構と考えられる。性格は不明である。



第132図 SK52出土遺物

SK55(第134図、PL.23)

4区南西側のK9グリッド北端にあり、標高約57.4mの平坦面に立地する。中世の遺物包含層の黒色土中で検出した。北側にはSK54が近接する。

平面形は楕円形を呈し、長軸1.18m、短軸0.84m、深さ最大0.30mを測る。断面形は、逆台形を呈す。埋土は、単層で黒褐色土である。

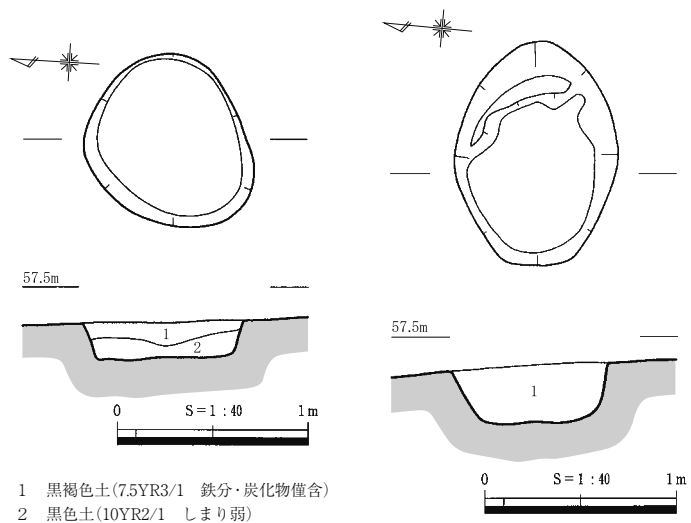
遺物が出土していないが、層位から中世ごろの遺構と考えられる。性格は不明である。

SK56(第135・136図、PL.23)

4区西側のK7グリッドにあり、標高57.0m付近の平坦面で検出した。中世の遺物包含層である黒色土中で検出した。サブトレンチによって確認したため、形状は不明な部分もある。

平面形は不整形円形を呈し、長軸1.32m、短軸1.20mを測る。最深部まで東側は2段、西側は1段のテラス状の部分があり、深さは最大で0.48mを測る。

埋土は、黒色土を主体とする2層を確



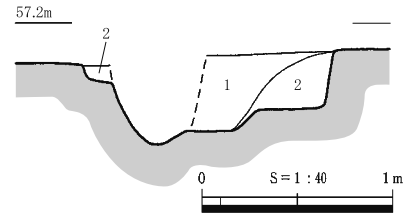
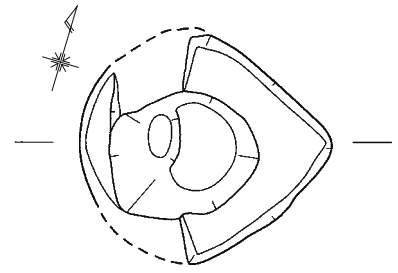
第133図 SK54

第134図 SK55

認できた。

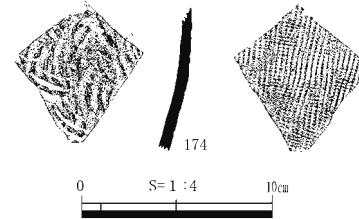
埋土中から、須恵器体部破片174が1点出土している。

層位から、本遺構は中世ごろと考えられ、須恵器片は混入品である。性格は不明である。



- 1 黒色土(10YR1.7/1 しまり弱)
- 2 黒色土(7.5YR2/1 粘性あり)

第135図 SK56



第136図 SK56出土遺物

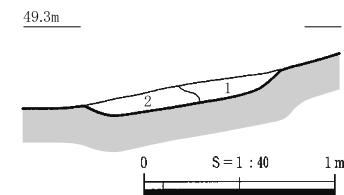
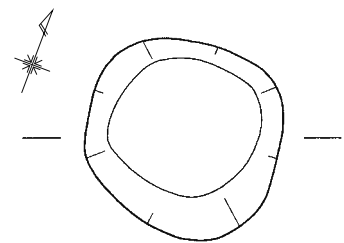
SK68(第137図、PL.23)

1区西調査区際のb4グリッド北東隅にあり、標高49.0m付近の緩斜面から急斜面への傾斜変換点に立地する。北東側にはSK64・SK65が近接する。

平面形は不整形円形を呈し、長軸1.06m、短軸1.03m、深さは最大0.11mを測る。断面形は、皿状を呈する。

埋土は2層に分層でき、いずれも多量の炭化物を含んでいる。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、層位から中世ごろの製炭土坑の可能性はある。



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2 3cm以下の地山ブロック含、炭化物多含)
- 2 黒褐色土(10YR3/1 2cm以下の地山ブロック含、炭化物多含、黒色土が混じる、粘性弱、しまり弱)

第137図 SK68

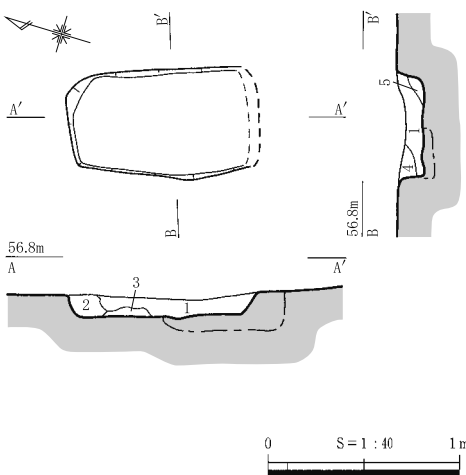
SK69(第138図、PL.23)

4区北西側のM4グリッドにあり、標高56.6m付近の平坦面に立地する。弥生時代から中世の遺物を包含する黒色土を掘り込んでいる。

埋土と基盤層との差が明確ではなく、全体の形状が不明瞭な部分もあるが、平面形は長方形を呈し、長軸1.14m、短軸0.58m、深さ最大0.14mを測る。断面形は、ほぼ垂直で、長方形に近い。

埋土は、黒色土、黒褐色土を主体とする5層を確認した。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、掘り込まれている層位から中世以降のものと考えられる。性格は不明である。



- 1 黒色土(7.5YR1.7/1 しまり有、粘性やや有。鉄分混じる。2mm程度のローム粒わずかに含む)
- 2 黒褐色土(10YR2/2 しまりやや有、粘性有。鉄分混じる)
- 3 黒色土(7.5YR2/1 しまりやや有、粘性有。鉄分混じる)
- 4 黒褐色土(5YR2/1 しまり有、粘性やや有。鉄分混じる)
- 5 黒褐色土(10YR2/2 しまり有、粘性有。鉄分混じる)

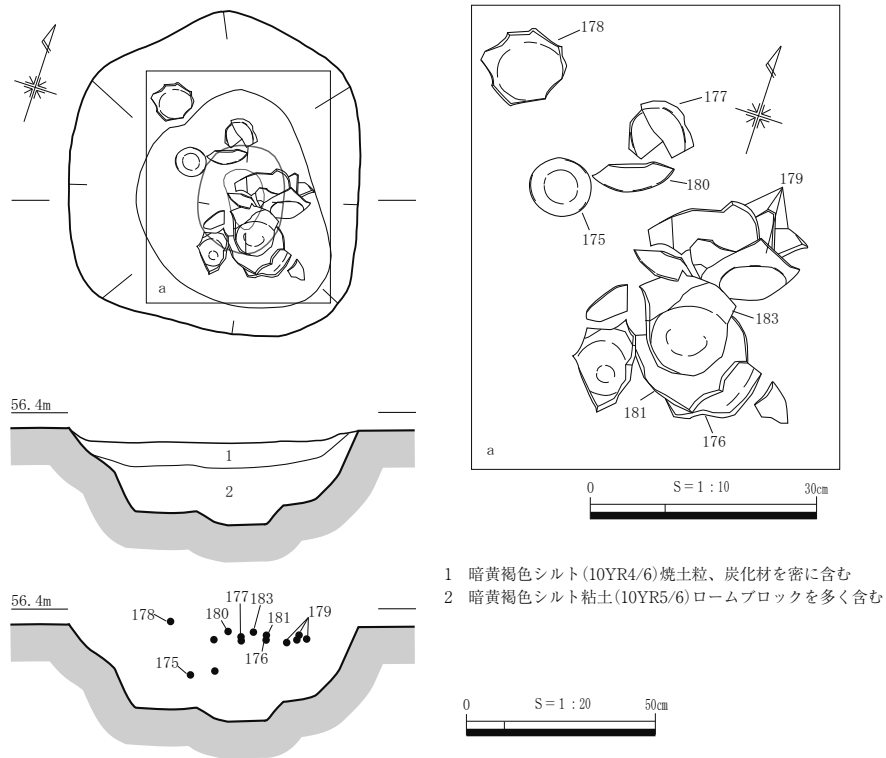
第138図 SK69

SK79(第139・140図、PL49・61)

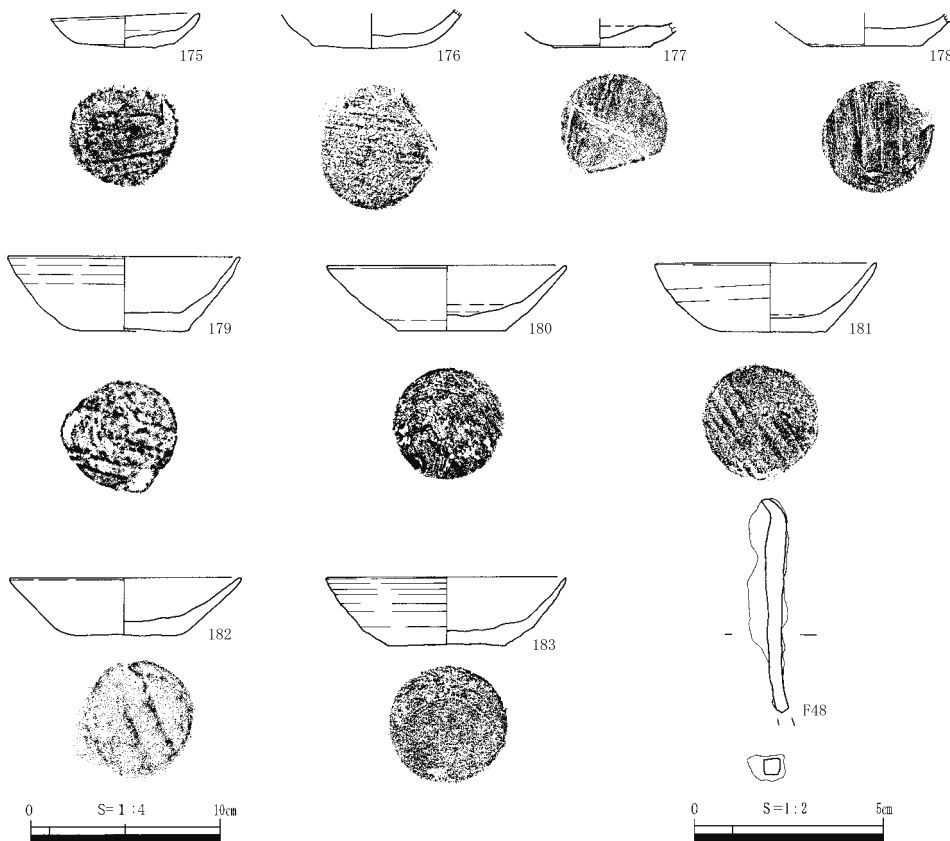
3区北東部のS2グリッドにあり、標高56.3mの平坦面に立地する。

平面形は、やや歪な隅丸方形を呈し、長軸1.7m、短軸1.54m、検出面からの深さ0.38mを測る。底面中央付近が浅く窪んでいる。

埋土は2層に分かれ、1層には焼土粒や炭化材を密に含む。



第139図 SK79



第140図 SK79出土遺物

形を呈する。深さは.034mで、断面形はやや歪ながら逆台形状となる。埋土は2層に分かれ、焼土塊、炭化物を多く含んでいる。

遺物は、埋土中から土師質土器小皿 175、坏 176～183、鉄釘 F48が出土している。坏181～183は3個体が重なった状態で出土しているが、その他の土器は散乱した状態であり、埋納されたとは考えにくい。したがって、土器は土坑内に一括廃棄されたと考えられる。

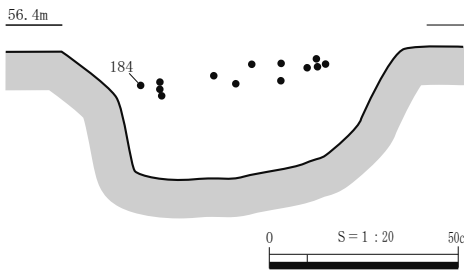
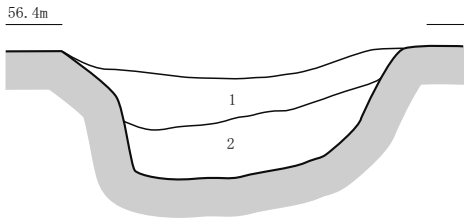
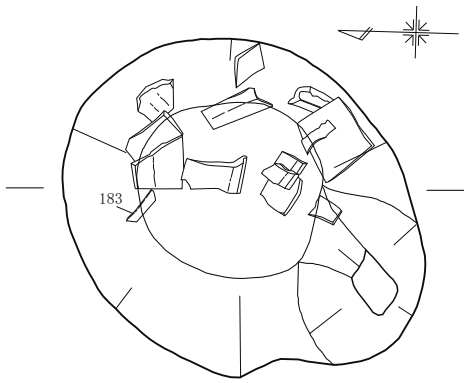
隣接するSK52と同時期の遺構で、遺物の出土状況も類似するが、SK52は土師質土器小皿が主体を占めるのに対して、本遺構は坏が主体を占めている点で異なる。

土師質土器は八峠編年中世Ⅲ期に相当することから、13世紀から14世紀前半と推定される土器廃棄土坑と考えられる。

SK80(第141・142図、PL49)

3区北東部のR3・S3グリッドにあり、標高56.3mの平坦面に立地する。

平面形は長軸0.83m、短軸0.71mの楕円



- 1 暗黄褐色シルト粘土(10YR5/6)焼土塊、炭化材を密に含む
- 2 暗黄褐色シルト粘土(10YR5/6)焼土塊、炭化材を少量含む

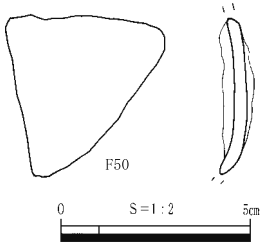
第141図 SK80

山のロームブロック主体層と焼土粒や炭化物を密に含む層が互層状に堆積しており、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は、埋土中から土師質土器小皿185・186、鉄釘F49が出土している。

土師質土器小皿は、八峠編年中世Ⅲ期に相当することから、13世紀から14世紀前半と考えられる。遺構の性格は不明である。

SK82(第145・146図、P L.61)



第146図 SK82出土遺物

3区北東部のS2グリッドにあり、標高54.3mの平坦面に立地する。SB14、SD8と重複しているが、土層の観察等からSB14、SD8に先行するものと考えられる。

平面形は、歪な楕円形を呈し、長軸1.04m、短軸0.96m、深さ0.15mを測る。断面形は、浅い皿状を呈す。

遺物は1層から土師質土器小皿184、越前焼甕が出土しており、廃棄されたと考えられる。越前焼甕は隣接するSE1出土137と接合した。

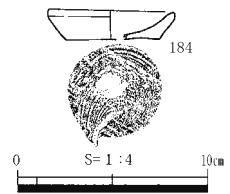
土師質土器は、八峠編年中世Ⅲ期に相当することから、13世紀から14世紀初頭と推定される、土器廃棄土坑と考えられる。

SK81(第143・144図、P L.61)

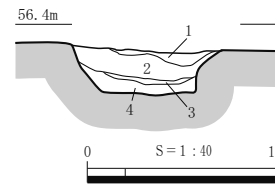
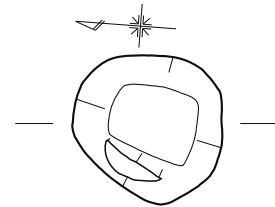
3区北東部のR2グリッドにあり、標高56.3mの平坦面に立地する。

平面形は、長軸0.82m、短軸0.76mの楕円形を呈する。深さは0.24mで、断面形は逆台形状である。

埋土は4層に分かれ、下層から地

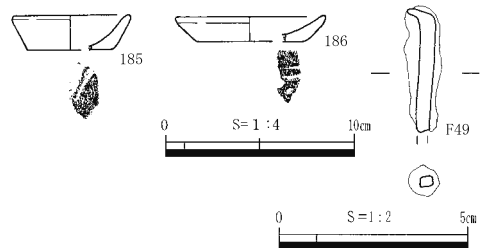


第142図 SK80出土遺物

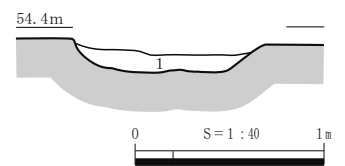
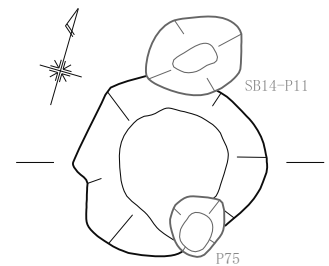


- 1 暗黄褐色シルト(10YR5/6)焼土塊、炭化材主体
- 2 黄褐色シルト(10YR5/6)ロームブロック主体
- 3 黒褐色シルト(10YR2/2)炭化物層
- 4 暗黄褐色シルト(10YR4/6)ロームブロック主体

第143図 SK81



第144図 SK81出土遺物



- 1 暗褐色シルト(10YR4/6)焼土、炭化物を含む

第145図 SK82

埋土は暗褐色シルトの単層で、焼土粒、炭化物を含む。

遺物は、埋土中から鑄鉄製鍋片 F50 が出土している。

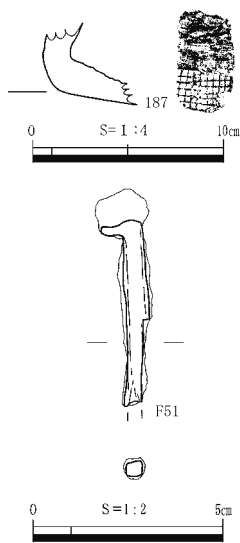
時期を特定できる遺物は出土していないが、遺構の時期は、埋土や周囲の遺構検出状況から13世紀から14世紀前半と考えられる。性格は不明である。

7 堀

SD 1 (第147～149図、PL.24・50・61)

3区西端の標高54.7m～56.8mの丘陵肩部に立地し、屋敷地の西側を区画する堀と考える。

南東－北西方向に直線状に延びており、北側では浅い溝が直角に分岐する。検出した長さは47mで、方位はN-30°-Wである。幅は1.5～3.0mで、深さは最も遺存状態の良い北壁で0.95mを測り、断面形は逆台形状を呈する。底面は2箇所ですでに24cm～30cmほどの段差が認められ、北側に向かい低くなる。底面での標高をみると、南端が56.8m、北端が54.3mで、2.5mの高低差がある。北端付近では堀の肩部や壁面、および底面に多数のピットを検出した。ピットは径20～30cm前後で、いずれも柱痕跡はなく、規則的な配置も窺われない。したがって、ピット群の性格づけは難しいが、堀に板材を渡し、杭で固定するような簡易的な橋が架けられていた可能性を指摘することができる。



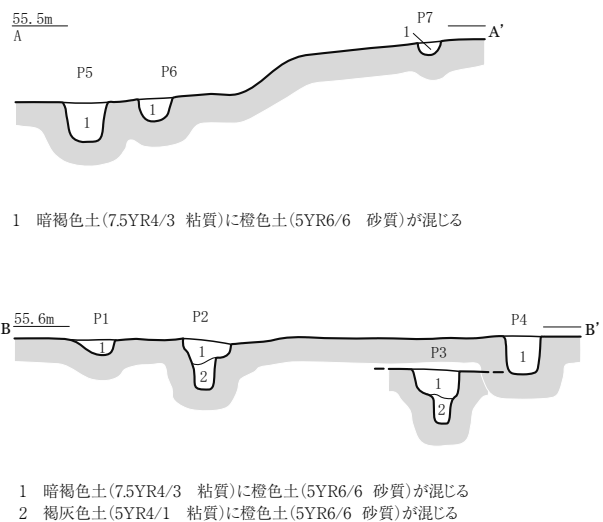
第148図 SD 1 出土遺物

埋土は暗褐色系や黒褐色系のシルト層が主体で、流水や滞水の痕跡は窺われない。

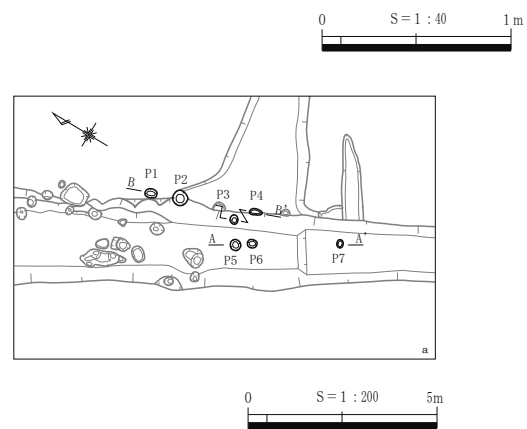
北側で分岐する溝を長さ7mほど検出したが、東端は削平され遺存していない。幅は1.5m前後、深さは20cmほどであるが、本来さらに東側へ延び、後述するSD21と同様に屋敷地内部を仕切る区画溝として機能していた可能性が高い。なお、同じく幅50cm、深さ5cmほどの浅い溝が南側に近接し並行するが、SD 1とは時期の異なる遺構と考えられる。

遺物は僅かで、勝間田・亀山系甕187、鉄釘F51を図化した。

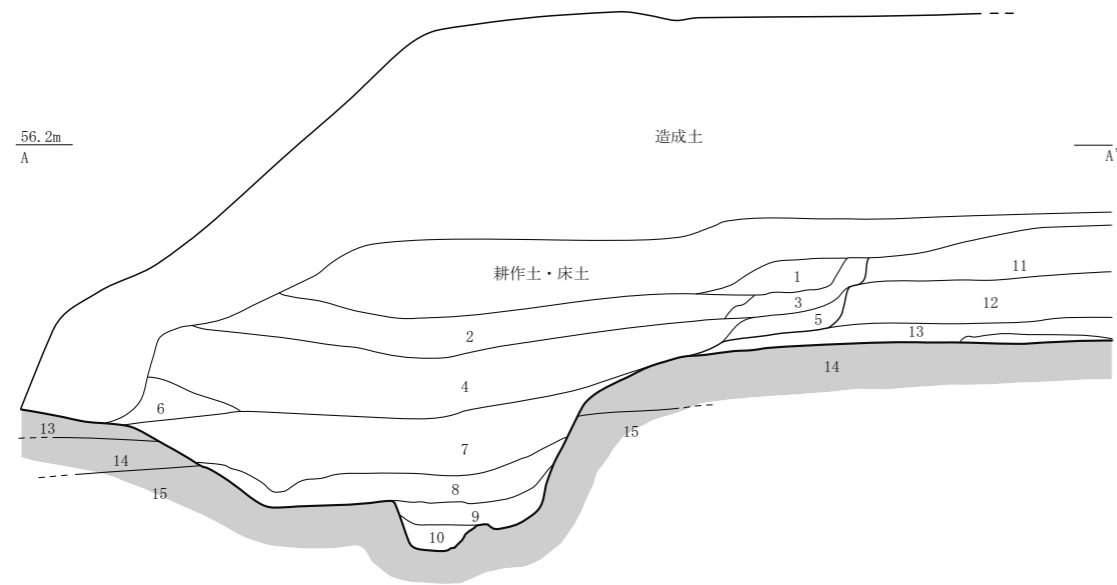
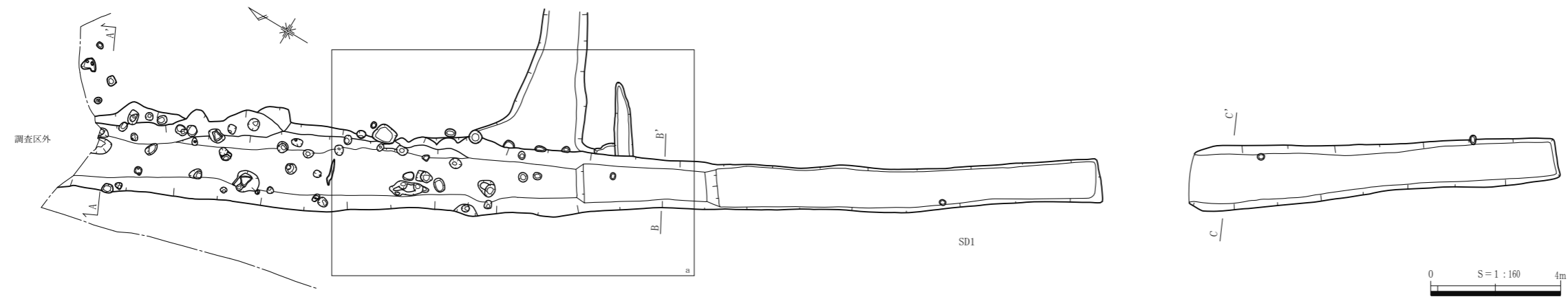
本遺構の時期は、後述する新SD18やSD15と断面形状や深さが類似することから、15世紀から16世紀頃と推定される。堀の南端は削平され消滅しているが、本来SD18に接続していた可能性が高く、屋敷地を圍繞するやや歪な方形区画の一部であったと考えられる。その場合、SD 1とSD18は直交しないが、それは屋敷地が丘陵尾根という自然地形に制約された結果と考えられる。



- 1 暗褐色土(7.5YR4/3 粘質)に橙色土(5YR6/6 砂質)が混じる
- 2 褐灰色土(5YR4/1 粘質)に橙色土(5YR6/6 砂質)が混じる



第147図 SD 1内ピット



A-A'

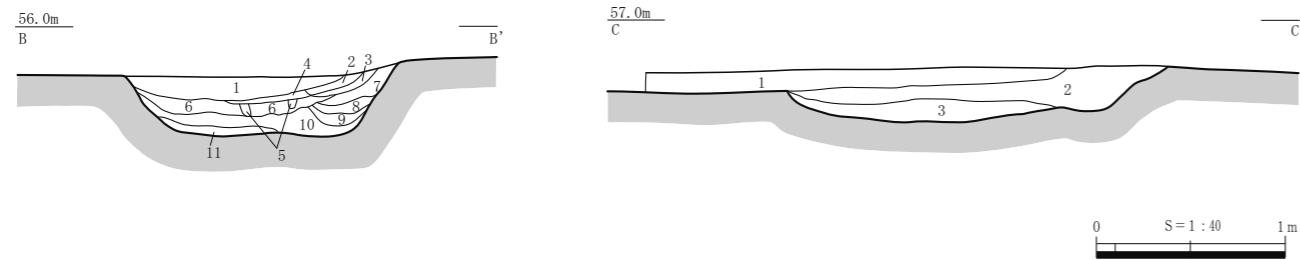
- 1 黒褐色砂質土(7.5YR3/2) 黄褐色ローム細粒(10YR5/6)を含む
- 2 黒褐色砂質土(10YR3/2) 黄褐色ローム細粒(10YR5/6)を含む
- 3 暗褐色砂質土(10YR3/3) 黄褐色ローム細粒(10YR5/6)を含む
- 4 黒褐色砂質土(10YR3/1) 黄褐色ローム細粒(10YR5/6)を含む
- 5 黒褐色砂質土(7.5YR3/1) 黄褐色ローム細粒(10YR5/6)を含む
- 6 5と同じ
- 7 黒褐色砂質土(7.5YR3/2)に黄褐色ロームブロック(10YR5/6)が混じる
- 8 黒褐色粘質土(7.5YR3/2)と黄褐色ロームブロック(10YR5/6)の混濁土
- 9 黒褐色粘質土(10YR3/2)と黄褐色ロームブロック(10YR5/6)の混濁土
- 10 黄褐色ロームブロック(10YR5/6)に黒褐色粘質土(10YR3/2)が混じる
- 11 黒褐色土(10YR2/3)クロボク
- 12 黒褐色土(10YR2/2)クロボク
- 13 黒色土(10YR2/1)クロボク
- 14 AT含漸移層
- 15 ハードローム

B-B'

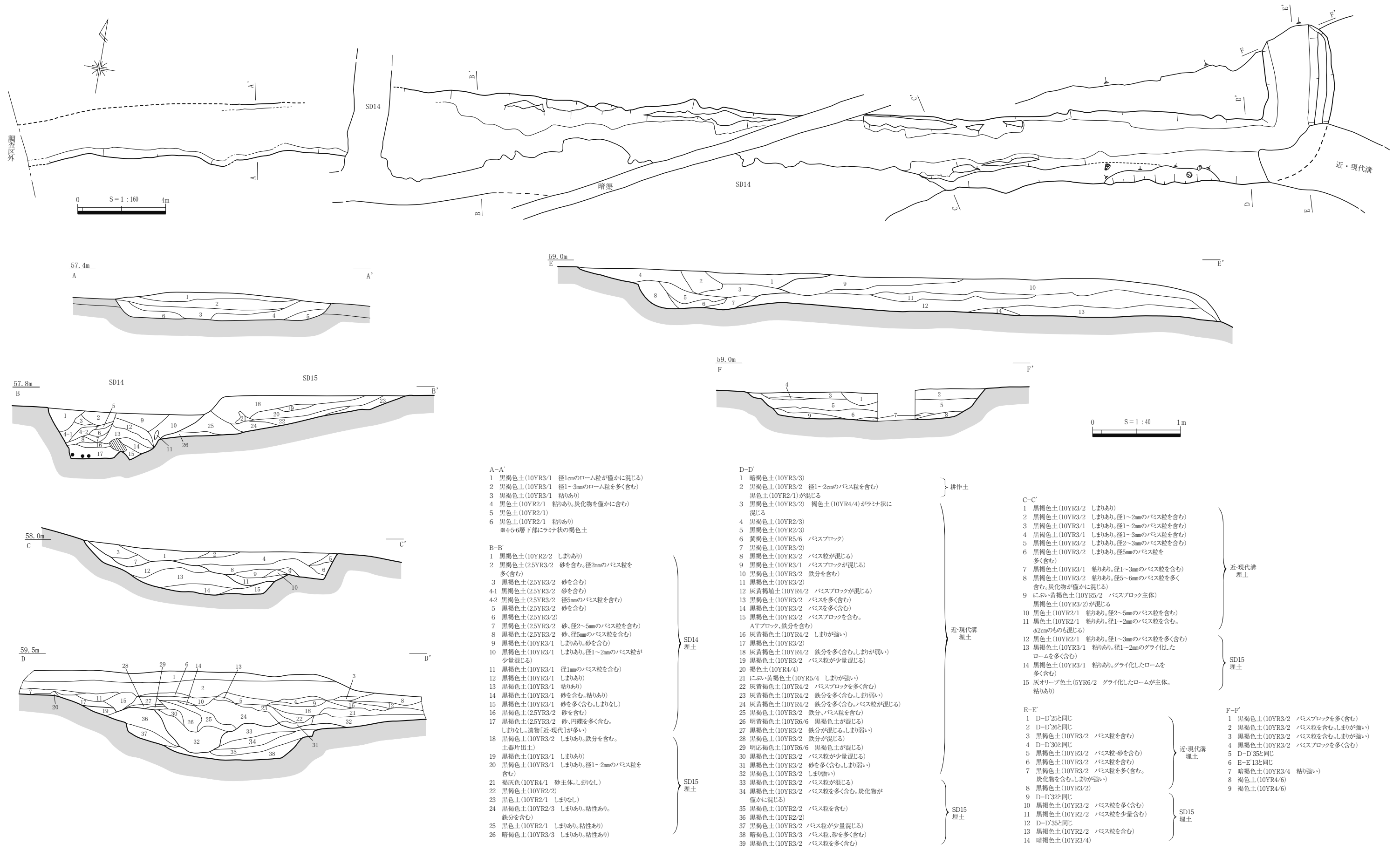
- 1 暗褐色砂質土(7.5YR3/3)に橙色砂質土(5YR6/0)小片ブロックが少量混じる
- 2 暗褐色砂質土(7.5YR3/3)に橙色砂質土(5YR6/0)ブロックが混じる
- 3 暗褐色砂質土(7.5YR3/3)
- 4 褐灰色砂質土(7.5YR4/1)
- 5 暗褐色砂質土(7.5YR3/0)
- 6 橙色砂質土(5YR6/6)に5の小片ブロックが少量混じる
- 7 4と橙色砂質土(5YR6/6)の混濁土。ラミナ状に堆積
- 8 橙色砂質土(5YR6/6)と5の混濁土。ラミナ状に堆積
- 9 7と同じ
- 10 暗褐色砂質土(7.5YR4/3)に9が混じる
- 11 橙色砂質土(5YR6/6)に5がごく少量混じる(加工形成層)

C-C'

- 1 造成土
- 2 暗褐色砂質土(7.5YR3/3)に橙色砂質土(5YR6/6)小片ブロックが少量混じる
- 3 褐灰色砂質土(7.5YR4/1)に橙色砂質土(5YR6/6)小片ブロックが少量混じる



第149図 SD1



第150図 SD15